

るまろうどは、ひんがしより來たる、朝彦の君なりけり、

此家のたつる柱の枝々はたかとし木にか宿に積むらん

右賀荷田信美新室詞

御嶽さうじ

今歲、寛政十一年の春三月その日、役の優婆塞行者の一千年にあたらせたまひき、おほけなきみことのりして、神變大菩薩の御名を贈らせ給へりとなん、千とせの後に、光をかいげさせ給ふことのかたじけなさのそひたまへる事を、誰もたふとみ奉るなりけり、大和の國かづら木の郡、茅はらの里にうまれさせ給ひて、いときなきよりも、道に御こゝろざしふかく、かたちはうば塞ながら、修行世の人によえ、孔雀明王の法をうまくおこなはせ、まこと雲風に乗り、かくれ神をつかはしめ、吉野葛木の高根を常のすみかにて、凡天か

下のけがれなき所には、いきて住給はぬもあらずとなん、韓國のむらじ廣足といふ人、つねにしたしく参りて、をしへかしくみつゝつかうまつりしが、後には、其才の高きを忌憎みて、時の帝に、うばそくこそうちく天の下押しらんきたなき心ありと奏せしかば、やがて伊豆の島國に流しやり給ふこと、文武の御卷のその年にしるされたりき、おほけなく、一たびは國つ罪にあたらせしかど、まがごとにしも侍りしかば、やがての世より今にいたりて、うつゝの事、後の世のこと、この御蔭をひたふるに頼む人多かりき、昔は御嶽さうじ、順ぎやくの道たがひて詣てしとや、今は世こぞりて、芳野を山口にのぼる、是なん、往しへの秋山の、ぎやくの峯の坂路なりける、翁三十あまりの古しへ、此高根にのぼらまくのすゝるこゝろして、年々詣づる行ひ人のしりに立て門出す、八月三日のあした、

猶あつけさの名残に、道芝は眞砂のやけに焼て、あなうらをさすばかりに、歩みぐるしかりしをさへ思し出られぬ、大和川のつき橋中絶て、水なきかちわたりす、藤井寺に詣づ、門の前なる水うまやに入て、晝の物とう出たるに、憎し、蠅のむらがりてけがすを、修行のはじめにかゝること物のかずならじとおぼす、土師寺に詣づ、この御神のことを、こゝにつたへ給ふは、國つぶみにあらぬこといものいふかしきを、さるいはれのありつらめ、我見たるものには、いまだかりし御時は、龍の雲に乗て、大虚に登るとくに、つかさ位みこゝろのまゝなりしかば、たそやいみ憎みて、あらぬ御とがめをばかうむらせ給ひき、三清公の革命のいさめいれさせ給はましかば、はるけき観音寺の鐘に寝ざめかなしませ給はじを、みかくれさせて後は、天の下に惜み奉りし餘りに、光の御子のとみにはかなくなら

せしこと、大宮の内に鳴るいかづち災ひありしこといもは、此御祟りぞといふおよづれ言の、大路にまでいひあへりしかば、やがてもとのつかさくらぬにかへり給ひ、世を経て後、ひだんのおとゝ、又太政大臣をも贈らせしが、またほどなくて、大富天神といはひまつるべく、御使給へりしことも見えたり、天満大自在天神と崇めまつるは、いつのみよのかしこみにや、博からぬ眼にはかけても云ふまじく、いみじき御罰かうむるべきを、産砂神にてましませば、あはれみゆるさせたまはんかし、先此旅路つゝみなかれと、ぬさちらしかけて、寺を出れば、南の方わづかにして、ほん田天皇のみさゝぎにいたる、里人はこん田と横なまれるよ、此大宮所なりし、輕島のあきらの宮は、いづこぞ、此國のこのあたりには、丘陵のあまた見ゆるが、ことごとく御墓所の名やあるべきを、空にはおぼしきだめが

たくて過ぬ、古市といふも、此さといふきの市町なり、細川畠山の軍の君のこもりし大城の跡もあるべし、もとめても見ず、石川郡の石川、繼橋してわたる、こゆればあすかべ郡なり、壺井の祠と申すは、源の頼義、よし家朝臣の御たま屋なり、阿妻の大との、みおやの君達にてましませば、いとしもつくりみが、せ給ふべき由ある所なり、上宮太子の級長しなの御はか、いとたふとし、こゝを截れ、かしこをたて、後あらじのみことには似ず、いかめしき御跡なり、山しる王の御みづからわな、きて、後を断せ給ふにはかなふべくおもへど、こも御爵かうむるべきにや、いとくろうなりしかば、山はえこえず、山口なる春日の里にやどりぬ、蚊のいと多きに、帳はやれまよひて、いを寐られず、かの檜わり子にむらがりしわろきものにまさりて、いとつらし、こも修行しゆぎのからきにやかぞふべき、いとうれしきこと、

からきことはわすれぬものから、三十とせまりの昔を、おろくにもおぼし出られて、この筆のあゆみはすなりけり、つとめて竹の内うちの山道こゆる、雨いさゝか降そゝぎて、篋笠の下に汗ながれ、いと苦しけなり、行手に梯本の里の柿の本寺といふに、人丸の御墓、石ぶみも立りといふ、此神の御跡とめて、歌聖傳といふ文かいあらはせしに、こゝもたしかならぬものなれば、いきても見ず、茅原寺、よぎ路なれど詣づ、菩薩の若うておはせし御かたちをうつし留めしは、世にも稀らなりと云ふ、今木の里を過ぐ、こゝの古物がたりは、花の頃吉野の山ぶみせし、岩橋の記に書出たれば、同じことおもひ出づべくもあらず、車坂こえて、よし野川の邊に出づ、山のたゝずまひ、水の流、いとおもしろし、岸蔭草にすだくは、機おりが鳴音よ、河内女の窓のあたり過らん思ひせらる、巨勢野の方より、我あ

とべより、追くるがごと、金がう杖とかいかめしくつき鳴らし、都田舎ひとつ聲して、南むがうざ大ぼさちと、高くさけびをらびつゝ来る、うたてなどつゝめかば、うちも殺しつべし、こも修行のひとつにねんじて追はれゆく、むつ田のわたりに来て見わたせば、柳ちる六田の淀の岸かげに、秋を時とて鳴くかはづかな、こゝにて河垢離といふことす、河におりて、かみつ瀬ははやしなど、ひとりこちてみそぎす、これにこゝろのあらたまりて、山路にかゝる、此行手、建武の帝の、都をこゝにうつし給ひし時の作り道なりとや、昔は飯がひの方より登りしとか、藏王権現に詣づ、ふん怒の御かたち三柱、夕暮のほにはいと恐しな、こよひ吉水院の前なる家やどる、相枕の行者たちは、はやりかになけくしく、物がたりからがふが如くに、隔のさうと取りやり、知るしらぬどちもいとむつまじ

げにて、やうく眠るほどに、蜂ふきや、あがきや、夜すがらにて、貝鐘たえず耳驚かすが如し、すがうの数々にはたふべけれど、忘れては何しにと打うめきて明しぬ、夜ごめに出るは、此宿のみにあらず、松あまたともしつれて、南無がうざ谷峯にとよめかしたつゝ登る、此ゆくも、きのふも、物となへよと教ふるは、文字の数こそ歌のやうなれ、こゝろ言がらもえ心うまじきを、陀羅尼などのやうにてぞ、其時すら、今一うたもおぼし出んやは、安禪寺にのぼりつく、西上人の、やがて出じとの三年の跡とゞめしを、来て見れば、こゝならめとは思へど、心もなくてつくりしかば、今はなつかしくもあらず、我に事たる山の井はあとなくて、窟をとくくとおとしかけたるはうたてし、青根が峯、こゝよりさしむかひてのぞまるゝ、
宇婆塞が旅寝の床ぞあはれなる、青根が峯の昔のさむしろ、御嶽によぢ

のぼる、南無行者が聲あとききにかまびすしく、しばし杖と、むべくもあらず、いはほをはひ、かづらをたよりに、或ははし立をつたひてのぼるく、いとさがしきがあひだも、をちこち見さけ、くだしも見れば、この来る道々、高くあふがれし山々峰々は、原野田畑のやうにて、たゞ高見山ぞさ、げ出されたる、蚰腹、小天上、大てんどやうなど、恐ろしげなる名も、追ひのほされつ、かね掛といふ巖の本にいたりて見れば、こゝなん山のつかさなりける、久方の光こそあれ、ゆく雲も吹風の音も、我より下の物にぞ有ける、西の、ぞき岩と云ふは、いくちひろしらぬ谷の深きにさし出たる巖なり、さし覗けば、白雲その下を走り過るひまくに、をぐるう見ゆるは、此ふかきにおひ茂る松杉のむら立なるべし、修行どもこゝに押おろされてさいなまる、さいなまれて、今より親兄によく仕へんとて、手をすり

てわふる、いとも見るめの耻かしきは思はぬなるべし、御堂にまうづるまでに、まがり路を行く、みなおこなひする所々のついで、今しれたり、ひんがしの覗岩、蟻のとわたり、平等石、何れもくからき目見する所なり、修行らが、おそろしきに、身も冷え、足は土をふまず、髪ひげそびえ立ち、聲いといたうかなしげに、陀羅尼や何や口やまず、よみぢがへりして、御堂のうしろよりめぐり下る、いと大けく造られしに、雲霧つねに蒸こめたれば、木かねのけぢめしられず、たゞ黒にすさまじ、こゝに釣たる鐘は、大菩薩ちの御杖にかけて、はるくこゝにといふ、遠江の國何の郷、何がし寺の物なりとか、一つの傳へには、北畠の中納言殿の、奥より上られし時、道にて陣がねにとり來られたるともいふ、そのまこと偽を問あきらめんもよしなしや、又こゝより五十町ばかり奥まりたる所を、小篠

と云ふ、そこは年毎にこの七日といふ日、天の下平らに安けからんを、いのり行ひ奉るなり、この御法にあはゞやとて、けふなんこゝに詣づるなりける、谷にくだり、坂路ふみこえつゝ、からうじて到る、日は山ふところに暮はてゝ、物ども見さだめがたし、板屋のわやしげなるに、板敷の上に、おみの木の葉打しきて、薬むしるを其上に並しけり、ともし火もかゝげずこゝに明すべく聞ゆ、圍爐のほだ木のもゆる光に、人々さぐりあひつゝ、誰がしはこゝにか、あなうしや、腹の寒きと云ふ、飢ゆともこゝに死なん命のかたじけなき、たゞく大菩薩つをたのみ奉れと云ふ、親戀し、女戀しとかこてるが中に、こゝにおきつるもの、いづちへかゆきし、かくたふとき御山にも、盗人の入ぬるよと云ふ、あなかま、あないみじ、さるものうたがひなせそ、心わかくてあしたをまで、神だにつかふまつる御

徳には、物失ふべくもあらず、けふこゝかしてにて誓しこと忘れやせし、天狗といふ神の、屋の棟に立て聞せや給ふ、ゆめくといましむ、皆わなくく、夜の明るをねんじをる、五日の夜の月、窓のひまにさし入るを、佛の來迎ありしやうに人々手すりて伏拜む、山ふかき所は、月あかしと見しは、忽にむら雨木立を鳴し降くる、枯枝などの吹折れてや、屋の上にはさと落るを、あはや天狗つふてなめり、あなとて、死入るばかりの聲して泣さやめく、おのが聲だに山彦の呼かはしつれば、くはやと云ひあへつゝ、夜はやうく明ぬ、かしら髪もしらげぬべし、立出て見たれば、思はずよ、こゝは山のかひのいとさくみちもなきに、大なる木どもの、雲すきも見えずおひ茂りたるに、よべの雨の名残の雫、絶ず落て、身にしむ所なり、こもり屋こゝかして、十あまりぞ立たるに、入つどひし人々、

千々あまりなりとや、草高く生ひて、常には人すまねば、むつかしげなるに、ひりかけをさへし散したれば、物うくわびしきことかぎりなし、木立は、おみ、むろ、岩楠のたぐひのみにて、松杉などは見えず、鳥蟲の音も、ふつに聞えぬわたりなり、山深き所は、なべてかゝるにや、ならはぬには、いとかなしくおぼしなりぬ、我やどりなる人の三四人、こゝより奥の、經が岩屋拜みせばやと云ふ、したがひはべらんにはとて、箆笠よるひ、跡につきて行く、山を巡り、谷をこえつゝ、道もなき小篠原の、肩すぐるばかりなる中を分迷ふ、十町ばかり来て、もとの小篠と云ふ、こゝにも大ぼさち、利元大師の御堂ならび立たり、今の所には、後の世に移されしと云ふ、行く行く道もありやなしや、されば年に一度はこゝに分入て、紀の三熊野に行なひすとか、昔はそなたより拜みめぐりつゝ、御嶽に到るを、

ずんの峰と申せし、逆なりといふ、吉野の道は、再び聖寶僧正の開かせしと云へり、僧正は光仁の御裔にて、修驗道のたふとき御傳へのかしこみを思ひ給へらるゝにも、ひたふるに心して、頼みたいまづべき御蔭なりけり、利元大師と申すは、僧正の御贈名なり、からうじてさす所に到る、見れば、いとも大なる巖をうつろにまゐりて、けたに削りなしたれば、御經いくらをも納むべし、何やくれやの御かたみどもを見奉るにも、寔にかくれ神は、此御爲にたぢからを盡してつかんまつりしにこそ、神變大菩薩つの御ことわりいはまぐもかしかかりけりと、天の下に物のさとりある人のかぎりは、あふぎてたゝへ奉るべき御名なりけり、今朝より雨はをやみたれど、箆笠あゆひしとゞにぬれとほりて、時しらぬ寒さに、思ひもぞ出る、清見原のおほんに、三芳野の、みゝ峩の峰に、時とくぞ、雪は降ちふ、

時じくぞ、雨はふるちふ、と詠ませしは、はたまことなりける、み
 み峨の嶺、一つには御かねが嶽とよみしも見ゆ、山の神を金精めう
 神と申す、又古き物語に、此山にて、こがねの丸がせを拾ひしとい
 ふことも見ゆれば、おろそげなる翁が思ふには、御金が嶽てふ名の
 由心うべかりける、みよしの、山分衣ひるまなみ、秋の時雨に
 涙そへつゝ、行尊僧正の笙の窟の雫は、おこなひ人のあはれなるを、
 何におとす涙ぞやと、おのれとがめられて、かいやりすつべく、猶
 分入れば、釋迦が嵩、三かさねの瀧にも到るべしと聞く、人々思し
 入ねば、もとの小篠かき分つゝくる、其三層の瀧は、西上人のいき
 てよめる歌ありしかと思ゆ、いざ見まほしきを、一人はいかでと、
 今ひとつの心のゆるさねばえゆかず、その時こそあれ、今はうつゝ
 なく迷ひゆく心の、すゝろに到て、仰ぎ見れば、山こそはかさ

ぬとを見れ瀧つ浪、くもを披きて雲に落るは、あやし、山づみの工
 みなせることは、人の思ひかねの外なるが多かる、物しり達は、何
 物をもいとせめてことわり盡さんとするこそ淺はかなれ、こもり屋
 の上に、大こくの窟といふは、大名持の神のすませたまひしにや、
 世に大黒と稱ふるは、一に大己貴と書るよりや、こゝにつどへるに
 ひ行者達が、一夜さんげといふこととして後に、此岩屋戸に詣づ、其
 詣づるさまは、關迦汲む桶を荷ひつれ、楊が枝のけづりかけしを、
 手に持そへ、口にくはへしさま、いと戯たりな、あまたうちつゝき
 てのぼり行く、いきて何わざ行なふらん、小笹分しにうみつかれて、
 追ひものぼらず、此夜月いと清し、みよしの、芳野の奥に旅寐
 して、世に似ぬ秋の月を見るかな、光はよひのまにて、入かたとお
 ぼしきより、雨しきりなり、今夜もうく、わび泣して明ぬ、七日の

行ひ、あしたより雲の名残なくて、人々歡ぶ、まろうど來れり、奥山住の里人といふ、老たる人の、頭に黒き巾をかぶりて、あやし、額に角あるかたちを作りなし、身には、駕輿丁の着べき麻布衣を、ふし染にして、僧俗のけぢめしられぬ出立したり、大ぼさつのまへしりへに、よろづをつかんまつりたる、かくれ神のみ末の人と名のる、行者達よ、御身を守りの札いたゞかせ給へとて、唯錢ほしげなり、さるはおく山人といへど、此御爲には、やつこらまとなりて立走るよ、もろこし魯ほうと云ひし人、これが神變を擧て空ほめせしを、人あさはかに、又是をば大ぼさつとあがむるなりけり、行なひの時になりぬ、神べん利元の御堂の前に、護麻木高く積はえ、導師をさいだて、げんさ驗者たちあまた、いかめしきかたちしてまゐりたり、千人にあまれるといふ行者、このまへしりへにはひふす外は、木にか

かり、岩ほに腰うたげて、拜みせんとなす、げんざのどきやう、れい錫ふり立て、螺は時々に吼る、ごま木の煙、御堂の軒に繞りて、空に昇る、黒くすざまし、日の光をさへて、谷峰にたなびくを、聲のかざりあげて、いみじくたふとがる、天の下の事は、この煙のなびくまゝにしるし見るといふ、事はてゝしかば、おがどちゝ呼びかはしつゝ、歸る山路あはたゞしげなり、どろ辻と云ふ所より道たがへて、どろ川に下る、さな下り八十町と云ふ、下りて、めての高きに岩屋ありといへど、足折たればいきても見ず、寺あり、洞川寺とまうす、文字につきて思へば、とろ川のとろの岩穴なるを、今はとろろうと呼ぶよ、寺は南のみかどの、足利の爲にせばめられ給ひて、實城寺の皇居をさへ再びこゝに遷しませしとや、むべもさる御造ざまなりと見給へしらる、何をおぼし知るにはあらねど、昔しのばる

るに身にしみておぼえ奉る、みよし野の奥こそわはれ世を捨て、
 入にし人のうきは數かは、むかしも山口の花見に分こし時、如意輪
 寺にたゝせます、後醍醐の御陵墓に詣てたいまつりしに、木立いと
 かんさび、物心ぼそく、すゝろに悲しくもおぼえ侍りしかば、
 みやま木の日影もゝらぬ下露に、ふりそふものは涙なりけり、まぢ
 の小路殿のいさめおぼしにかなひなんには、かゝる所におはさふべ
 きやはと、恐れみながらも思ひはべりし事をさへ思ひ出にき、こみ
 なみ坂といふは、河南と書くべきを、下れば河戸の里といふにむか
 へられては、この坂路荒野の狀にて、しもとだにおはぬ草の原なり、
 時しる花のくさく、そよ吹かぜになびきあひたり、萩の花、しの
 のをすゝき、桔かう、をみなへし、野藍、りうたん、我見しらず名
 づけもしらぬ花々、行くてに色をまじへて咲みだれたるが中に、何な

らんかんばしきが、吾荒妙の袖にしめる物から、いといたうすいろ
 に物いはまくすれど、此見るにはまけて、口はふたがりながら、
 またも来て衣はすらん露ふかき、野はみながらの秋の色香に、柿本
 の朝臣の、秋つの野べに花ちらふとよみませし、かしこの昔をこゝ
 にうつし出られて、かひあるけふの山ふみなりけり、下市の水うま
 やにて、墨壺を取忘れし事をさへ思ひ出しかば、こゝよりの道は、
 むなしくて止ぬべくなりぬ、

此昔がたりは、秋の夜のつれく言に、いにしへ何くれの事ど
 もいひなぐさむが中に、吉野の奥のたゝずまひをかたり聞ゆと
 て、つゝめき出たるを、あるじの信美さかしく筆とりて、かい
 つらねられしなり、三十とせ餘りのいにしへは、おぼろかにこ
 そあれ、されど譚言して何せんに、たがへるふしは、垣根

の蒨草にかいつみやりてん、

初秋

月あかき夜を誰かはめでざらん、ふん月望のこよひ、庵を出て、わづかに杖をひけば、鴨の河づらなり、雨ふらぬほどなれば、月は流を尋てやすむらん、おとをしるべにとめくれば、むべも清しとて、人々手にむすび、かいそふりなどして遊ぶ、風高く吹き、雲消え、影さやかにて、何をか思ふくまのあるべき、月見ればすゝろに物の悲しきぞとは、竹の中より生れ出し貌よ人の、天にいまやの別をしむにこそ、泉漲れども煮るべき物も持たらず、酒もとむる家もちかからずとて、たいさしあふぎてかたりとすとはなしに、大かたの人は、往しへの跡につきて、八月のこよひ、文作り、歌よみ、杯の流のまゝにあそぶよ、さはをかしき一ふしをはらみなしては、夜よし

とのみ思ひたのめしに、あしたより雲立まよひ、野分だつ物の音して、村雨さとり通りし跡の雲まより、さし出たる面輪うれしけれど、さすがに思ふにたがふことのあるには、とばかりながめすて、さしこめし閨戸のすきまより、物にさはらでさし入たる光は、目さめ、心もすむらんかし、さてしも君まつばかりに夕といろきして、居たちつゝあらんも、あひなう若々しかるべき、時はいつにもあれ、よひわかつきをもちいはじ、垣根の萩の葉のさわぎ、草深き蟲の音のみやは、朧夜の花の木かくれ、時鳥一二聲の音づれ、片山里の門涼みに、螢三つ四つ飛かふには、命ものはへなんこちもせらるべき、雪霜のしら／＼しき光などは、あまりにすぎましとやいはん、しらぬ浪路の舟とまりして、笹のすきもる影は、いかにわびしからんものぞ、もろこし人の、友どち舟うかべて、さがしき山の岸陰に、物

のねかなしく遊びたらんには、さすらへずばいかで、かゝる境の秋を見るべきと、おぼすらんと、罪なくてさるわたりまでをと、ひとりごち給ふと、いづれ、都府樓近きにも、たれこめていませし君こそは、月をかなしきものとも打守り給ふらめ、老が家をうしなひ、人をもさきだて、世に落はふれよるほいつ、命生たらんを、しばしにてもといふ人々に扶けられて、め、しくあなづらしき身の、月見て遊ぶは、何心ぞや、

歌もよむとはなしに

月こそは影も身にしめ初秋のさよ風涼しかもの河つら
月見つ、夜の更行は久方の天のかはらも河たかへして

中秋

八月十日まり五日、あしたより空いとようはれたり、故郷人誰かれ、

こよひ月見んといひかたらふ、野や分まし、棹やとらせんといふ、翁今は都住して、野山の秋ともしくもあらじ、みをつぐしのほとりまで漕せんにはとて、軽らかなる舟もとめて、酒よき物などはとのへたるべし、五百津舟つどふ中を漕そげて、河尻に漂よひ出ぬ、月はやく生駒根にさ、げ出たれば、夕沙満ちた、へ風そよめくにぞ、蘆の浦廻きたなくもあらず、武庫の高嶺に入日のにほひのこりて、西の海はるくしと見わたさる、帆手打つれて入來る大船、いさりすとや漕出るちひさき舟、秋の木葉のみだれに散うきたり、鴉のいづこにか、やどりさだめて飛かへる空、鷗のあさりすと、をりぬる渚、さしくる汐の波がしらに躍る魚の光は、昔もあまた、ひ見しを、此夕べあそびそむること、ちせられて、いとまたのし、おのれよりさきにうかべし舟、あとより追ひくる舟、皆千里の外に心を游ば

しむとぞ見ゆ、絲あり竹あり、しらべいとをかしうて、海の神をお
 どろかしつべし、月はいと花やかにすみわたるほど、宮人のかくる
 栲ひればかりの雲もなびかず、星の林のもみぢも、こよひの光には
 まけたりな、風いさゝか吹いで、波のあやいとよう見極めらる、
 暮はてぬれば、繞れる山はをぐるうなりて、淡路島さすがに見えず
 なりぬ、友垣一人が云ふ、こよひの遊び、誰々も心くまなくこそお
 はすらめ、唐歌やまとうた、きたなげなりとも打うめき出ばや、翁
 先よめと云ふ、あひなの言や、昔の貫之躬恆にあらずば、今夜の影
 に光あらそふべきかは、洞庭西湖にこがれ出たらん棹の歌も、酔の
 すゝみにこそ、ほこりかにも打出づべけれ、翁が木の芽煎て、はか
 なるすさめるこゝろに、何とこまねび出ん、舟のよそめばかりに、
 歌やふみやはかなふ遊ぶらんと見おこせたらんを、ほまれにしてや

みなまし、此さしあふげる影にも、面ふせつべきわざなれと云ふ、
 一人が高らかに、棹にさはるは桂なるべしとうたふ、淀のわたりの
 夜ふかきてふためしに、これをあはれがりて、人々よまざるなりぬ、
 月は中空にかゝやきて、あかしくとすみわたりて、常世のまろうど
 のかりくと鳴て來たるぞ、いと珍らしな、海の色は青にびのきぬ
 引はへたらんごとし、さすがに風ひやかなれば、きぬかさましとい
 ふべき人もなきわたりに、飲ほし、くひみちて、すゝる寒しな、か
 へらやと舟ばたをたゝきて、かぢとりにもうたへと云ふ、かれも酔
 たれば、棹の歌をかしげにうたふ、須磨よりや明石よりや吹く、西
 の風にいぎなはれて、漕ぎもてかへるほどに、夜は丑みつばかりに
 やなりぬらんといふ、

文治それのとしの秋、八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ、れいの事にて、御供つかうまつる人々、みさきおひ、御あつつかふまつれる、渚に遊ぶ蘆たづのあゆみして、疾からず遅からず、つらをみださずねり出させ給へるを、大路に膝折ふせ、かしてみたいまつる人あまたあるに、けいめいして、あなとだにいはせず、世にいかめしくたふときみ有様なり、かへりまをしゝて、御手輿にめさせ給ふほど、さとき御まなじりに見といめさせたまひ、みはしの忌垣のもとにかしこまりをる法師のあつるが、見上げ奉るつらつき、旅に飢ゑて、いと瘦黒みづきたるに、衣杖笠などもかたるものゝさましたるが、めを偷みてうすいまりをる、なほ人ならずおぼしけん、あの法師が修行すゐりするやう、名をもとへとおほせたうふ、御輿ぞひの若さむらひいそぎ走りよりて、ありがたく御目たまへり、

いづこよりのすぎやうぞ、名をもまうせよと云ふ、ゆくりなきにおどろきざまして、雲水にありか定めず侍るものにて、名は圓位と申すといふ、聞しめされて、さればこそ聞知たれ、穴熊のたけき獲ものゝたぐひならで、賢き人得たるためしに、いざなひかへらん、我あとにつきて來たれといへとて、召つれさせ給へり、御館に入らせ、御装束改めさせ給へば、やがて大となぶらあまた照しかゞげたり、けふの道ゆきづとゐてこと仰たうふ、法師參れとて、おまし近き所の、一間なる所の、すの子に召されたり、大將殿見おこせ給ひて、昔ははこやの山の御宮づかへせし人の、世をはかなきものにおほししみて、身は黒くやつしたれど、月花の歎きのほまれは、物の心なき吾妻人さへ聞知たるぞ、文字の數だに歌とのみ思ひしも、かう指向ひては、ものゝふの負と心もあらずなりぬるぞ、八百日ゆく濱の眞

砂の中には玉とて拾ひ收めたらんを、かたりて聞ゆべく仰たうぶ、
 いみじくかしくまりて、思ひかけず、大木の御蔭に参り侍れば、い
 ともか、やかしきにぞ、たゞ夢路たどるやうに侍りて、聞え奉るべ
 きことも侍らず、さとき御まなこに見現はされ侍ること、いとも有
 がたけれ、伊勢の海ちひろの濱におり立ちならひはべれど、かひあ
 ることも打出侍らぬには、是とて捧げ奉るべくもあらず、君にもか
 ねて學ばせ給ふとも漏り聞奉る、天のしたまつりぢちたまふ御うつ
 は物の大いなるに、おぼしよらせ給ふには、かけてもおよぶまじき
 をさへおぼし知り侍る、大空に羽打つけて飛ぶたづの聲、霜枯の淺
 茅がもとの蟲の音、いかで取なめて聞ゆべき、あなかしこしと申す、
 打よまさせ給ひ、弓とりし人の、もとの心の猛きには、よむ歌も直
 くわからさまにと聞くはまことか、歌はものゝふの荒々しき心には、

よみうつすまじきものに、宮人達はさたし給へりとや、軍に出立て、
 笛つゝみの音、馬のいなゝきは物とも思はぬを、この三十餘りの學
 びには、こゝろのおくるゝはいかに、こはかしこき御心にもおぼし
 まどはせ給ふものか、いにしへの代々の帝は、馬に鞍おき、弓矢み
 とらして、軍にたゝせたまひし、其おほんをよみ見奉れば、たけく
 直々しく、しらべもいと高しとこそ打聞侍れ、いでや歌よまんとて
 は、ますらを心をとりにかくし、あてになよびかにのみ詠うつすべく
 するこそ、此道のいみじき煩ひなれ、君がさとくたけき御心のまゝ
 に、打まねばせたまはんには、今の世の人、誰かは立ちあへ奉らん、
 三尺の劔をとりて、大風起り、雲飛揚すとうたひ、槊を横たへて、
 烏鶺鴒南にと咏ぜし君達は、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや、玉
 造らがいみじきをすりみがき、染殿のやしほの色も、はかなき目う

つりばかりは何にかは、されど谷ふかき鶯の聲、信濃路出る荒駒の
 あゆみ、いづれの道、何のわざにも、始よりすぐれたらんは、鬼に
 こそ侍らめと云ふ、人々あれ聞給へ、世はすてのがれても、頼もし
 き人の心ならずや、汝が遠つおやの秀郷といひしは、世にいみじき弓
 の上手となん聞ゆ、傳へたることもあるべし、かくこそとおぼしき
 みぬることは、忘れずてぞあらめ、事一ことにても教へ承るべく、
 こはますく恐れある御とはせなり、御物語のはてくは、つは物
 の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの瘦法師にだに、
 物とはせ給ふことのかたじけなさよ、むかひ奉りては、をこがまし
 く、家の傳へなりなどて聞えや奉るべき、まして有がたき大宮づ
 かへをいなみたいまつり、みおやたちのいつくしみをさへあだなる
 ものに、年わづかに廿五にして家を出たるいたづらもの、弦ひき

一つだに心にとめし事も侍らず、たゞ一言のわすれがたきは、賞
 を重くし、罰を軽くせよといひしと、任ずる者をはづかしむれば危
 しと云ひし有難さよ、士卒の疽を病るを吮^ほしは、人の心をよく買な
 すといへども、まことの情よりも覺え侍らず、寵を減して、人を
 わやうきに墮し入るは、將帥のさがしきにて、國を治め、天の下を
 するべき君の御心に非ず、軍を出したまへる事の、あやしきまでか
 しこくませるを、餘所ながら聞奉るには、此かたの御とひゆるさせ
 給へとて、額を板敷にすりつけて申す、君ゑみほこらせたまひ、口
 とく心さとき法師なり、こよひは月見る夜ぞ、物がたり今ははたし
 てん、人々とかはらけとりはやし、曉かけて遊ばん、まれ人は酒の
 まざるべし、鹿^し猿^いの中に立交りて、歌よめといふともよむまじ、た
 だ我まへにあそべ、風ひやかなるにも、あかず飲み、ものきたなげ

に喰ちらす人々は、わたゝかにもこそ、此火とり法師に参らせよとて、白かねもて作りたる猫のかたちしたるを、とりつたへて、君より賜はるとて、前に置たり、しゝ猿は猶心たけし、鼠をだにえとらぬ瘦法師が爲には、似つかはしき御たま物ぞとて、三度押いたゞきぬ、あした御暇たまはりて立出るに、御館の人やどりに、誰殿のわらはべならん、くゝり袴のすそ、朝露にぬれそぼちて、いと寒げにをるを、見て、是とらせん、火埋みて手足わたゝめよとて、彼きらきらしき物をあたへて、かへり見もせず立ちぬ、童打おどろき、これ見給へ、見もしらぬ法師の、見もしらぬ物を賜ひつるはとて、青ざむらひに見すれば、目口をはたけ、かくたふときほうもつを、誰かは得させん、ぬすみやしつと云ふ、さらしく、道のそらにかゝるものやはあるべき、あなおそろし、殿に奉りてたまへと云ふ、や

がて御たちにもて参り、つかふる君を呼出で、しかゝの事となんと申す、いとあやし、大將どのゝ法師にたまはりしを、いかでわらはにはえさせけん、いふかして、先いそぎて聞え奉る、君打ゑみたまひ、彼ゑせ法師、あなづらしく、をさなげなるものくれしとて腹だゝしくや思ひけん、我門のまへに捨行つるよ、法師とても男だましひなくば、修行もえせぬなるべし、されど家を出て猶身を守り、才に誇りて、野山にまじり、歌よみてのみあるは、捨人の棄てらるべきあさましさぞかし、一度けがれし物、其童にとらせよとて、取おろさせ給ひぬ、西行後にこの事を人にかたりていふ、右府はまことねぢけたる君なり、口に蜜したまへど、心には針のおはずぞ、漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人みな此君の網の中に入られたるは、我佛の冥福といふことを生れ得させけん、たい悲

しむべきは、神の御裔の、此後やうくおとろへさせ給はん世の姿なるはとて、涙とゞめがたくして物がたりしとなん、心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずも、打ひそみぬべし、

此話、服子遷所撰大東世語德行篇出焉、余偶讀之思之、釋氏捨家一身無住、而況是等小物何有所用耶、然德行過當耳、由是今戲以斯言演之、惟恐損害古人乎、

劔の舞

伊豫守源の朝臣、鎌倉の大將殿の御心にたがはせ給ひしかば、都をひらきて、よし野の山ふかく隠れさせ給ひしかど、そこにもはたえおはせで、いづちしらず逃れゆき給ひけり、おもひ人静の子、かひがひしくこゝまで従ひ奉りしが、中々の御情をかうむりて、都にかへるべく仰せたまはりぬれば、打泣てとゞまりしを、山の法師等、

やがて捕へて、うての使に奉る、御行方わからさまにしらずと申せば、問ふべき便の人なれば、猶うたがはしさに、あづまに召下したまへりき、本より直々しき操のまゝに、知り侍らぬ事を、問せ給はんより、命めされよかし、天の下は御心のまゝならずや、いづちに逃れかくれ給ふとも、つひにはえられたまはん、いみじきこと見奉らぬほどにとて、其後は露ばかりも言を交へず、いかにし給ふべくもあらず、たゞ守らせてこめ置給ひぬ、御代はをさまりしかど、猶怠るまじき此頃に、いたく屈し給ひてやおはしけん、静は天の下の扇の上手となん聞く、一さし舞ひて見すべく仰たうぶ、いとつらくうるさく、今は立舞ふべくもあらぬ身のほどを、打泣ていなみたいまつる、北の方より御使あり、うちくの仰ごとを、さこそ情なくもおぼしうとひらめ、いとほしきことなれど、此御心をと、月日

過さんほどには、御はらからふた、び枝をつらねさせ給はん世をも待つけ給へ、其御契の爲にこそとて、いでかくす、ろぎて聞えたいまつるなれ、されど御土器のはえばかりには情なし、氏の大神に詣で、廷尉の君の御身つゝみなかれのねぎごとして、神をいさめ給へかし、おほけなく天の下の爲、御はらからの御中むつまじからん御爲に、心ゆかずとも、打まけてたゝせ給へといひ聞えさする、さすがに頼まれて、涙をおさへつゝ、いかさまにも御仰のまゝにかしこまりぬと申す、大將殿よくもすかいこしらへつ、神もたのしとや御覽ずらんとて、日をえらびていそがせ給ふげる、其日になりぬ、あしたより空清うはれて、御垣の内外の松杉のむら立、枝をならさず、鳥の囀りほがらゝとのどかなり、大將どの、北の御方、若君たちの御こし、かきつらね出させ給へり、捕はれ人のほ、あづかり

の武士の中に取かこみて、御あとなつきて參る、みてぐらあまた、おほん神のふと前に高くつみはえなし、かんなぎがふとのりとごと、大宮の内にとゞろき聞ゆ、事はてゝ、なほらひ殿に入らせ給へりける、いで物見るべく、北の方若君はみ籠たれこめておはす、老たるものゝふ達、左みぎに居なみて、袖打たれこれ見る、いと物うく、心にもあらで、歌垣の中よりすゝみ出たり、烏帽子の緒むすびたれ、色こきゝぬ打かさねたる上に、山藍すりもとらせし袖長きに、赤き袴のこはゝしきをふみはらゝかし、立たるさま、あてにこめいて、しろくにほひかなる面輪の、すこしおとろへしやおぼすは、まみのおもげなるやうにぞ打見えたる、繪にやうつしうべきと、人々さざめきあへり、ものゝね高くしらべあはするほどに、扇をやをらとりかざし、袖すこしひるがへし、聲はいとほそらにはひありて、先

あはれとぞ聞たまへる、その歌、

三草かる、鎌倉山のや、神のみづ垣の松には、鶴ぞ巢をくふ、千とせのどちに、

あし引の、山のさくらはや、色香あくまでも見ん、かぜふかぬ世に、

一さし舞ひをはりて、ふし拜みす、君をはじめて、人々あかずめでたしと見たまへり、又立ちあがりて、

みよしの、吉野の山はや、時なくぞ、雪は降といふ、時なくぞ、雨はふるといふ、其雨の、時なきが如、我涙の雨は降ける、よしの山、雪ふみ分て、いづちしらず、いきし君はも、

いとかなしげにうたふを聞く人、みな身にしみて、鼻からくおぼゆ、また立ちあがりて、木曾の麻衣ならぬ色よき袖を、まくり手にして、

扇は劔と打ふりつゝ、

山ゆかば草むす屍、海ゆかば水つくかばねぞ、大君の、國のみ爲に死なんと、立てしみ心の、たけく直きを、誰いひさきて、世にはふらしけん、狡兎は死して狗は烹られ、高鳥盡きて弓は薬に、

うたての古言や、いたはしの我君や、

かくうたひつゝ、ふたうあらゝかに、扇をはたゝと打はらゝかしつるは、誰をかうつと、見る人あやしがる、これまでなりとて、幕をかゝげて入りぬ、大將殿おぼす、はての劔の舞は、我を憎しとてうちしならめ、さは物かづけたりともうれしとも思はじとて、御硯召て、御たとうの物の香しめる紙に、御筆はしらせ、取つたへさせ給へり、

をみなへしぬしなき宿の庭草はくねりてひとり立つがかなしき

また、

我ぞ先見てましものをあだの野の葛のうら葉の恨みきくにも

今日は胡地の妾ならぬを、せめての心やりにてありわびよとなん、見奉りては、涙いよよといめかたくてぞある、其紙のはしつかたに、墨つぎ、見わかつかまじく、はかなげに書きて、そこに棄置きたるを、又とりつたへて、御前に奉るを、とりて見たまへば、

鎌倉のみこしが崎によする波岩だにくやす心碎けて

哀のことや、よくいたはれ、放て返すとも、いづちにかいぬべき、直き操を托るわざして、しひて物とふなとて、情しくこめおきたまへるとなん、かたりつたへたる、

漢高斯韓信、右府滅廷尉、倭大一般、然韓信外臣、廷尉骨肉、殘忍過漢高者矣、

つゝらふみ四

つゝら冊子五

水無瀬川

安永庚子冬十月、遊于京師、道歷攝北、而過水無瀬川、川在于山城國界也、然溯流尋徑、乃入溪澗中、巖上之飛湍高丈許、所墜激浪撒珠、其響與松風相應、濺々走下、未陟百步、水淺涓々、石出沙明、旋入幽篁裏、忽然不見下流、而溪遠林過、即出前路、則厓間丈餘、水勢倏洶湧、足以灌田野矣、於是始覺其脉潛地中、及于此復湧出乎、說文云、水脉行地中、潏々、蓋此類也、嗟呼造化、一奇事哉、于此古人之詠詩、不待解而旨趣自了然、因以賦之、二章、

阿理氏那幾、豫乃多免之、登波加都志、連騰美難世、能河伯廼、女豆羅師伎、加母、

微南珂味八毛三遲知禮婆敝彌奈勢我破斯堂仁文安紀乃以呂半迦與
遍類

郝廉留錢

伴蒿蹊の家に人々あつまりて、題を分て文かける、其題、
蒙求といふ文の中に探れる、

風俗通云郝子廉飢不得食寒不得衣一介不取諸人曾過姊飯留錢

席下而去每行飲水常投一錢井中

むかし、飢ゑて物ほしみせず、年寒けれど、秋の蟲のつゞりだにさ
さず、肩のまよひもわびしともおぼさずなん、まいて塵ひとつだに
世にもとむべきかは、氏は郝氏にて、名を廉といふ、むべも譎なら
ぬ親のたまものなりけり、姉ひとりもたりき、その郷、その人
の女にて、其の家なんよき酒つくり、田圃多く領し、門高く、家の

子あまた召つかひて、いと賑は、しかりける、されど此廉なる人、
おのれいふがひなく、爪くはるゝにはあらねど、常にいきとむら
ふこともをさくせざりけり、あね君よきをのこ子ふたり、女の子
一人、朝ゆふ前におきすゑて、萬たらはぬことなき世にも、たゞこ
のおとうとの心一つをとりかねて、時々使して、何やくれやの物お
くりやれば、いともかたじけなきよしに、推いたゞきて後、使のろ
くにとらせて、いさゝかのものもとゞめざれば、いともすべなく、
かなしうおぼしわづらひにけり、かど人物へまかる便にとむらひに
けり、いとうれしうて、北おもてなるところの、我おましにゐてい
きて、年月のことゝも、心ぐまなくとひみかたりみ、いかで時々ま
かん出たまへ、斯ておはすを、あるじもあたらしきことゝは、こと
にしものたまへるものを、こゝにも日比とゞまりたまはんには、い

とうれしくなん、いたいけなるものらが、かいそゝぶるはむつかしけれど、おはれとおぼしめぐみて、おひたゝんやうをも見つがせてよなといふ、あるじ外よりかへり来て、世に稀人こそ入せけれ、酒いかで参らせざる、問はせ給はぬことは、おのれがだいゝしさにとがむべうもあらず、こゝなる人と時々申出ること、あたらしりと人の羨むを、青雲の志だにおはせぬ、あひなうさふゝしき、いともいふかしきは、物まなびなん、そのかたの爲とこそ承つれ、世をまつりてつべきみかど参りをもせで、ふかき山はやしに逃かくるためし、我世より見れば、いかなることゝもおぼし知られぬよ、壁のこぼれにとなりの光をたのまんより、身の財もていかでかゝやかさゝる、何某とか云ふかしこき人の、錢ばかりたふときものもなし、翼あらねど空をかけり、足なくて千さとをゆくなど、いとあり

難きことを書わらはせしを、人のよみて聞せ給ふるまゝに、いよゝますゝわが佛とも、君とも親ともかしづき奉るにや、人なみゝになりて、親おほ父より住ふりし所々すりし、いな倉酒くらの町をつくりそへ、わの見ゆる竹の葉山の限までは、おのが田ばたに領じなりぬ、あながちに世を逃れまゝおぼさば、此わたりいづこにも住給へ、朝夕のことゝもは子どもらが見つき奉らむ、おひさきあるものらに、うちゝ家とみさかゆべきことを教へたまへかし、猶うちゆるびて、こよひもあすも御物がたり聞えかはすべし、にひしぼりのこの頃、おのが二つの眼をてらして、多くの手足をあだゝしからせぬを、錢の神はよしと思すらん、只今たゝ参りきこゆべしとて、走り出つ、姉君立ちかはり、あるじはかくねもごろになんおはす、ひたぶるにおもひたのみ給へ、世に御爲あしからじ、親のかた

みとなんおぼしきみぬるにはとて、いとほなちがたく聞ゆ、たゞかたじけなしとのみ、もだしがたくぞこたふ、女のわらはのさがしげなるが、やをらさうじわけて、おもものいとよう侍り、参らせばやといふ、何もくきようしてまゐらせよと云ふ、わらは御だいなさ、けいふ、汁もの、あつもの、何くれと取そろへたり、ぬや盡しつゝ、くひはてぬ、茶くだものまで心ゆくあるじなり、けいふなんむねくしきことの侍りて、このあなたまでまかんで侍るを、こゝ打かたぶきて過し侍らんは、いとなめしとて、彼處に待わびたらんが情なし、遠からずまうで侍らん、せうとの御うしろみさせ給ふみ心ざしの、いともかたじけなきを、朽ばみたる袖にはえもつゝ、みあへず侍るとて、つと立て出づ、姉君あなう、我おもふなかばをもおぼさぬには、何ごともきこえ給はずと打うらむ、あるじも來あひて、こはいかに

ぞや、さりがたきおこなひどもかつくおほせて、頓て参るべくするを、わりなの御急ぎや、けいふは放ちてむ、とく給へとて門送りす、姉君いと本意なげに、居させし所の蘆は、らふとて、むしろとりやりたれば、物そのしたにあり、あやし、とりて見たれば、錢いくらをつゝみて、みあへ代と書つけたり、あまりのことに憎くさへなりて、これ見給へとて、見すれば、さるにても、物しりばかりかたくなしきものはあらぬ、かたゐなどのさまなるを、おのれ見にくしともおもはで、獨世をすましたる、中々につらくし、おひさきあるものら、ゆめ物學ばすなと、爪はじきをして蜂ぶきたる、世のことわりとは、誰も聞つべし、あね君せんすべなくて打なかれたる、かしこきにや、あらずや、しらずかし、昔もかゝる人は珍らかなれば、しるしてつたへたりき、

古戰場

唯心尼、我難波のやどりをとひ來て、かたりなぐさむるほどに、
 れいの手ならひにすべく、物らいひてきかせ給へと云ふ、翁もし
 ばし物わするゝには、何ごとをもまなび出べきを、山の紅葉、野
 の淺茅の色づきたらんも、月影きよく、雁のつれわたらんも、か
 う垂こめてあるには心もゆかず、いふとも何のにはひやあらん、
 それは年のほにかぬあはれながら、みゝふりたりし、あながち
 なることを今おぼしいでたるを、求め奉らばや、このころよみつ
 る、もろこし人の、いにしへの戦の場を過ぎて、いとかなしげな
 ることかいたまへるが、まん名に書すくめたるには、よむにこは
 ざはしく、聞知るまじきことのみ多かり、これが心ばへ、すこし
 學びて聞しらせ給へと云ふ、あなさがし、それは秦か漢か、近き

代かなどあるには、猶まのあたりにも、世の亂をおぼしきみて、
 打も出らめ、治まれる世の民草の、さるすさまじきさかひに行い
 たるべくもあらず、ましてまのあたりなることならぬは、何の辨
 もあらず、いともあたぐしきを、されとわざをぎらがたつゝ舞
 のたぐひに、見聞ぬことをもかたり出てなぐさめんにはとて、物
 によりかゝりたるまゝに、つぶくゝとつゝしり出たる、いと物ぐ
 るほしきはかなごとなりや、

昔、しづ屋のうし、難波の大城もるつらに召加へられて、まうのぼ
 り給ひし時、信濃の國さちかうの原といふ所を過て、讀せ給ひし歌、
 ものゝふの草むすかばね年ふりて秋風さむしきちかうのはら
 此歌、加茂の翁のよしとほめさせしかば、友垣の中には、いとほま
 れあるものにかたりあひ侍りき、其野はや、人の語りしを、今おぼ

し出れば、かぎりもなくひろらなる所なり、西のかたの、大木蘇小岐會の嶺を越えて、此野にはくんだり來るなり、東は、諏訪、和田、風を、碓氷の嶺々に立つゝきたるべし、それがあまりの山々嶺々、立繞りたるには、ゆくさくさ、おてもこのも、限のありて見ゆれば、さばかりの原野ともおぼさぬなるべし、夏過ぎ、秋風吹立て、篠すき蘆がやに、はひまつはるゝ真葛の、うらみおもてみさやぎたつ、露は御笠と申せなど云ふべく散りみだれしには、道ゆく人の、弓末のみに見えがくれして、はたご馬の、行々人すまぬ霧の籬に立ち隠るゝ、こゝなん、甲斐、越後、此國のますらたけをの、たゝかひの場にて、旗さし物は、今見る雲霧のたえゝなびくに似て、弓ほこつるぎ刃の亂は、尾花高がやよりもしげく、大ぶえ小笛の音は、ありかさだめずすたく蟲の聲か、吹渡る風の音か、仇がうつ鼓か、こ

こちまどひぞしぬべき、けふはかなたにかちほこり、あすは又うしろを見せて追うたるゝよ、そのあたむすびし始をとへば、深きうらみのあるにもあらず、かたみに、龍の雲にのりてみ空をかけりわたらんと、ほこり奢れる心の、すさまじきがなすにこそあれ、流るゝ血はいさゝ川とせかれ、碎くる骨はさゝれとも敷きみちぬべし、かくて年ふりたらん後は、此あらがねの土の下は、ことごとく屍の積みうづみたらんが上にこそと、ふとおもへば、身の毛たち、つめたき汗は衣をとほすべし、しか心まどひしては、霧原望月の野に、放かふ駒のいなゝきを驚かれぞする、残れるあつさの空に、流るゝ星のゆくへを、鬼の火に見のおそれして、ゆく手や近き、こし方やなどおぼしまどふを、心をしづめて思へば、我其仇か、かれをかたきともうらむべきにあらず、大君の御垣の内の國なりとも、いづこの土か

人の骨のうづもれたらざらん、年をふり、土にかへりては、春のら
小田すきかへすより、千町のおくてかりをさむるまで、男をとめの
よどれまみるゝひぢりこも、そのいみじきものゝまじこりたらめ、
今まのあたりならずとも、かしこき人はおぼしゝるらめ、あなはか
な、あないみじ、猶うたへらく歌は、

みこもかる、信濃の國は、山ゆけど、野ゆけど荒き、其道の、道
觸の神の、み心も、荒びやすらん、國柄に、生あます人も、あらし
雄の、たけびをらびて、人國を、己が家庭いへに、人の君は、おのが
やつこと、仇むすび、恨みをむくひ、大鳥の、長き啄はして、とれ
どあかず、家をばいでゝ、親も子も、かなしき女をも、うけ沓を、
ぬぎつるが如、いかり猪の、かへり見もせず、劔太刀、夜もとり
寝て、夏蟲の、ともしけつまで、身をわすれ、及をしのぎ、戦の、

場に死すとも、紫の、名高の浦の、名を、しみ、末の世までに、
かたり次ぎ、いひつぐことを、ひたすらに、もとむる人も、天つ
ちの、かぎりあらねば、いさをとて、人のほむるも、此野らの、
草葉における、しら露の、落てくだけで、後あらんやも、

反歌

千早振人をとらふと馬はせて荒野の末に日は傾きぬ
籬たきたてつきなめて遠方の仇守る野に月澄み渡る
後の名を頼みはてすは丈夫の命を風の塵になさめや

聽雪

あはれく、老たる人ばかり、見ぐるしく朽をしきものはあらぬ、昔
は都への雪いかならんと、風だにさむく、雲の立まふ夕べは、出や
たゝましなど思ひをうごかせしに、それさることにて、この四とせ

ばかりいにしへ、このやどりもとめで、住つきぬる時までも、ひ
 月その日、雪いとふかう降つみたるを、待よろこべる友どち、ふ
 たりみたりかいつらねて、きえがてまでも野山にまじりしは、たゞ
 きのふの如まわすれぬを、かうもおとろへけりな、都を雪のふるさと
 にせよと、伴の翁のよみて聞えられしに、又小澤の翁の、いかにな
 がめつらんとて、
 かつ咲てかつ吹ちらせ花よりも、花なる庭の
 松のしら雪、となんいひをくられしかば、
 さくとちる風のなが
 れのあやしきは、空目の花の林なりけり、とかへし聞えしなどおほ
 し出らる、今は目こそ疎けれ、足こそなえたれ、この降る雪に物ば
 かりはいはんとて、紙すゝりとう出たれど、指は龜のごとにかゝま
 りて、筆あゆますべくもあらねば、おき火かいまさぐりつゝ、こし
 かたをしのび、今を打なげきては、れいのくりことすなん、いとほ

かなしや、神無月、時雨の雨に染し木末の、散はて、後は、野山は
 色なくなりんで、高きいやしき、おのがほどく、に冬でもりして、
 春を待つこそわりなけれ、あしたより雲けしきたち、嵐はげしきに、
 やれたる窓の紙は風を噺りて、いといたう寒きに、夕づけて雪やも
 よほす、物の音ふつにたえたりしに、たゞしとくと鬼のあゆみて
 くる音するは、雪かみぞれかと、はひ出て、北の窓すこし明て見た
 れば、ほどなき庭をさしおほふ、隣の松が枝の葉に、いとしろう降
 つみたるを見るにも、いでいかで出やた、まし、比枝比良に立つら
 なる山々、高きは雲にかしらつき入れ、低きは物につまれたるさ
 まして、よそほひ立ち、ゑめるが如く、妬めるに似て、われ天の下
 のかほよ人とや打ほこりたらん、野はもろこし人のしろかねをし
 と見しは、猶曇りげなり、神の織けん栲の白布を、幾千々むら引み

だりたりと見ば、そも機ばりのけぢめ見ゆべし、林は、さか木葉に
 木綿とりかけて、神の出ましのみさきにさゝげ出たつとも譬ふべし、
 やゝ光をのこして暮はてぬと見るく、空晴れ、風すこし吹て、雁
 がねの鳴てわたるほどに、月や出ぬと、すのこに立いで、見れば、
 はやく山のはをはなれて、晝よりもけにあかくしらぐしく、星の
 かゝやきそひて、千里の外までも、いさゝけの隈もあらじと思ふは、
 かくひたやごもりして、閉たる眼にさへ、まさまのけしきして、心な
 ぐさむなん、いとあやしき、埋火たきつき、湯たぎらせ、木の芽の
 香のみすゝるひをり、へいじかはらけとりはやさぬ、よそめいかに
 さふぐしからん、我難波人は、雪は都の物とのみ思ひこがれては、
 いかにながめつらんなど、そのをりくはとひこしつるを思ふにも、
 老たるおのればかり、見ぐるしく、口惜き人はあらじ物を、かうま

で居かくまりぬれば、山と降つみ、巖とこほりたる下にうづもれて、
 春立つぞともおぼし知らぬ、三越路の山里人ぞ、我は、

其二

雁がねの故郷としも云ふめる、越の國々はや、冬の雪の山とふりつ
 み、いはほとこり、深き谷は丘となり、高き木末も、道の芝草と埋
 もれ、或は崩れなだれて、旅行く人の關路となりて、老たる駒さへ
 さすかたをうしなふ、さるわたりならぬにさへ、おはにな降りそと、
 いにしへ人のなげきしは、これが煩はすなりけり、宮古べの雪は、
 しぐれふるかな月過て、風ひやゝかに、雲がちなるには、朝よひ
 となく、照日ながらに散かひて、衣寒しもといひつゝも、立出て見
 れば、高山端山、なべて赤はだかに見るめなく、野ははたつ物こそ
 あれ、下紅葉せし小草もかれはて、霜に碎かれ、風の塵とゆくへ

なく吹まよひ、いは橋ふみこゆる山川のせも、薄ら氷とづるほかは
 さゝやかにだに音もせず、野路の小川のさゞれもしがらみも、風に
 吹かほかされて、池沼は忘れ水とや見すぐすべき、さはこゝを瀬と、
 きはくしく、あめにみち、つちを覆ひて、降つむながめのしらし
 らしさよ、雪よく、冬をおのが時とはすれど、大かたの年なみを
 見るに、む月立て、望の日ころまでこそ、一さかたらず降つみて、
 あな面しろのながめはあんなれ、冬をおのが時とすれど、春はおの
 れまろうどざねに、心ゆくあそびするか、む月立ち、なほ吹風は寒
 きにも、日の影うらくと、山の南おもてに霞たな引そめて、去年
 よりふゝみし梅の、ゑみをひらき、鶯の初音さゝやかならず軒にお
 とづれて、芽はる柳の枝は、空に動くけしきなん見ゆ、さるは人の
 心もゆたけく、高きいやしきるやくしく、よろこびをのべつゝ、

うときもいきかひして、ことなきを祝ふたのしさよ、唐うた、やま
 と歌、道々しげに、糸竹の遊びも何も、春をまづことぶくなん、年
 のはにあかぬためしなりける、雪よく、冬をおのが時にて、春を
 いかに、霞をけち、花を降うづみ、鶯の涙を氷らすは、物みな嫉
 ましくするか、人のこゝろをなぐさめ、人の心をいたましむはなぞ、
 あめのしたのかほよ人の、あやにくなるさがにも似たるか、あした
 より雲けしき立ち、照日ながらにいと寒き日、立出て見たれば、

たちめくる山の嵐にくたかれて散るか都の春の泡雪

應雲林院醫伯之需擬李太白春夜宴桃李園序

やよひの望の夜ころ、かすみながらに、夕かけて月いとはなやかに
 さしのぼりて、庭の櫻が枝に先かゝれる影の、花に色をあらそふは、
 似る物もなくあはれなり、人々此木のもとにおりゐて、酒くみあそ

ふ、あるじの翁いへる、月日は箭を射るに譬へ、人の命はゆく水の跡なきに云ふも、こよひや引てはなたぬほど、瀬によどむひまといはいかに、さはいたづらにながめんやは、花の思はんをやさしみたまへとて、かはらけをすゝめ、筆硯さゝげいで、物求め顔なり、まろうどぎね云ふ、行く水と、過る齡と、ちる花を、まてと云ふにといまらずとや、我如きはとまりて何ごとをかなすべき、年もゆけかし、水もよどまざれ、たいこよひの花ばかりは、あすは雪ともと打まもらへをる、わかくさがしだちたる人の云ふ、酌てあかぬは、大伴のそち君こゝにおはすに似て、言に擧てうたは、貫之躬つねも昔の人ならず、酒ははかりあさくとも、ことのしらべつたなしともいへ、此めづる心ばかりは劣らじものを、我先とて、打うめき、はやりかにて、

大原や臚の清水春の夜の月をさくらに掛けてうつれる

醉なきせぬ人の云ふ、山のたゝずまひ、水の流、時々の草木の色香、鳥の聲蟲の音、いにしへ今たがはじを、これめづる心ことばの、古きにをとるこそ、いとも爪くはるゝわざなれば、我は中々なることいはじとて、袖たれ、打もだしをる、一人は觴を擧げながら、

櫻花影のやとれは久方のかつらの枝もともにかさゝん
翁さびたる人の、

よしさらは跡は花にゆつらなんかたふく月よ我を誘へ

さすがに打泣たるはうたてし、まろうどぎねも心すさびやして、

咲花の雫にぬるゝ我袖を月に干すとて夜はふけにつゝ

あるじいとら酔ずゝみして、人々の詞の花は、木末も色なくぞ見ゆ、風さそはねばちりもはじめず、月もあかときかけては、春の夜みじ

かくもあらじ、酒の泉猶盡ぬぞとて、ふときはうしとり、聲いとた
からかなり、

酒を醸かて湛へし壺の中に長き月日はありとこそ聞け

物らいはぬ人々は、おのがじ、酌みつゝ、御罰いたうかうひりぬと
いひてなん、

故郷 傲韓退之送李愿歸盤谷序

一夜力齋主翁かたりて云ふ、蘇子瞻云ふ、唐に文章なし、唯韓昌
黎の、李愿が盤谷に歸るを送る序のみきらしくし、常に之になら
はまく思ひては、筆を止る事幾度、あゝ彼をゆるして獨た、しめ
んと、此語につきて、此序を熟なふこと年久し、前には太白の春
夜宴を、國ふりにかいあらためて贈られしを、世に珍らかに思え
て藏めたる、又是をも其ためしならばやと、試るにあらざれば、

これをいなむは蘇子にまねぶに似たり、よしや、これが註かく人
にならぶべく、若よみたがへ、心をあやまるとも、道々しからぬ
たはわざは、人とがむまじきぞとて、筆はとりぬ、いと鼻しらむ
べきさがしらなり、

むかしの人も、世にあへるあり、時を失へるあり、其あといともお
ほかめるを、更にかぞへあげんが煩はしき、世にあへるが賢きにも
あらず、時うしなへるが愚なるにもあらず、身の幸ひのおくれさい
たち、あひ遇ぬにこそあらめ、世に遇てほまれとる人の、後におとし
めらるゝもあり、樂しとするも、うしといふも、求るまゝにはあら
ぬ、誰が興ふるたを物ぞや、昔は聖の御代に生れあひて、賢しと云
ふ人の、ひとり高きみくらにのぼり、一人は山にはひかくれしを
おもへば、身のほどのたがひあるをいかにせん、世にあへば馬車を

道にとゞろかし、みかどに参りては、つかさくのうへにをり、思ふを奉り、言を納れまゐらすに、君を始め、このしらせます國の限りは、其事行なはるゝは、いとも有かたき幸ひ人なりけり、さるは求めねど、四方の國つ寶を庫につみ、山や江や、獲かたきものを、朝夕の箸に下し、心のゆくまゝなるを、かしこき人は、足るとのみにはあらず、あな恐ろしとさへ思議りては、忌さくる人もありしとや、是を露ばかりもおぼしまらで、わたゝかに打かさね、腹ふくるるまでくらはんが、酬ひ悪からず終るもあり、或は中空にしてやめられ、あるは後いかならんとつかへをやむる、やむるをかしこしとせば、出るを愚なりとせんか、出て遭ざるは退き、擧らるゝは進む、是ぞ世に立つ人の心にして、おのがほどくをたもつなりき、あながちに隠れしぞきたらんもたがひたらめ、すゝむべくにしぞくは、

身をあやまれるにて、後とりかへさまほしき世もいでこんものぞ、又退くべき時をうしなひて、罪かうむるを、後いかにせん、垣根の菊を折はやし、南の山を朝よひに打望みたりし人は、此いはほの中にかへりしたぐひの、ほどくをたもちて安きを樂しむ也、やめられてかなしともおぼさぬ人、ことにたふとし、我と避て飢につき、水に入し人を、おろかなりともいはぬは、さるべきことわりのいとせめたるにこそおはすらめ、罪なくて、海山の面白き所の月を見てましと、獨ごちし人は、おほやけにまめくしからぬにはあらず、みそかに打歎かるゝよしもありつらめ、かの谷深き所の民は、心こそきすぐなれ、つらつきおにくしく、鳥の囀りに物いひつゝけなんは、何かたらふべくもあらぬ、そも故郷なればこそあれ、こゝに歸るは、心を安きにおかんの願ひ也、しらぬ國、とほき境にゆけば、

山は高くそはぐしく、ありその波おどろしくして、すむ人もか
たちこそ、乃のおにしくしからんには、いきて誰とか交はらん、都わ
たりこそ、山のたぐずまひ、水の流、木草の花も、おのづからにこ
やかに、あなおもしろとながめらるゝ、こゝを棄ていづこにかは、
されど在たき所をさへうしとおぼすは、たゞやすき一かたのねがひ
にたがふからなり、世を見れば、若き男どもの、酒うる家にうかれ
遊ぶにさへ、十にふたゝびなどや心になふらめ、大かたはあるじ
が立まひを空ほめし、歌姫等が心をととりつゝつとむるには、思ふに
かなふ夜こそとぼしからめ、怒をたへ、足らざるをしのぶは、いと
もくるしげなりとは、老て後にこそ思ひしらるれ、物ひろくしり、
人にこえたらんと思ふも、若きほどのはやり心の煩ひなり、物學ぶ
は、人におもねるにひとしと云ふ教もありとや、田舎とても、ひな

のみやこといふあたりの人は、このわづらひをもとむるまけじ心の
おほかり、都にあれど、老がとときあやしげにおひ立しものは、こ
このふる堤の陰に、かたむものゝさましてよろほひをるにも、むか
し、かたはしばかり見聞しことさへ、名残なくわすれにて、眼やみ
つかれ、花の匂ひ、月の光もみといめぬは、在て何のかひやはある、
中々に昔の田舎住こそしのばしけれ、さきのほまれ、後のそしりも、
あなわづらはし、只うまれたるほどぐに、寒からず、ほしからず
ば、ひとの國、故郷のけぢめもあらじ、彼谷ふかきところの有様、
いきて見るとも、すまであはれをしらんやは、住て都のわびしきは、
身のほどのまづしきなり、退之の文の、世にひとり立たるは、天の
たま物か、つとめて到れるか、是ゆるしてしりに立つ人も、おのが
程をしりたるなり、出てはつかへ、過ぎるはしぞく、其ほどぐに

安んずる人の、樂しみふかきをさへ思ひしらる、それにつきてうたへる歌、

山高み、めぐれる谷の、水きよみ、木草の花は、春秋の、色香あ
らそひ、鳥の聲、ほがらくと、明ぐれの、しづけき空に、行く
雲は、こゝろなしとふ、心しも、ありやあらずや、山深き、谷隠
れして、住む民の、しのや葺あへ、松の戸の、待つこともなく、
夏冬の、うさをもいはで、晝はも、田刈斧とり、夜はもよ、眞柴
折たき、かづら綯ひ、おのがほどなる、なりはひを、うしともあ
らず、たぬしとも、しらで在ふる、故郷を、何心して、雨雲の、
よそに見すて、此谷の、深きゆいで、中空に、そびえ立たる、
喬き木に、遷りて見れば、こちぐの、枝葉をしげみ、香ぐはし
き、花をよそほひ、眞玉なす、實をば捧げて、大宮に、つかへま

つれば、天の下、おほふばかりの、袖ふりはへ、ふつまに鞍おき、
あぢまの、車とゝろに、飛彈人の、繩引はへし、大路さへ、所
せきまで、雲の旗、風になびかせ、まへしりへ、八十ものを等、
弓箭おひ、銚つきたて、あゆまする、つかさにしあれば、皆人
は、野邊の鳥むし、七種の、寶はさゝれ、家にあれば、錦をま
ふ、こし細の、すがるをとめら、右にゑみ、左に媚て、うまざけ
の、泉をたへ、山に入り、江につりえたる、くさぐさを、かし
はでめして、かしは葉を、敷とりなべて、あかなくも、きこし、
家は、いつのまに、和泉の柚が、うつ斧に、枝葉はしほみ、根を
つらね、薪となしぬ、そを見れば、喬きはいつら、青雲に、聳え
し峯は、世の塵の、積てなりにし、山なれば、くづれたをれて、
赤駒の、あがきに碎き、玉ぼこの、道行く人の、わら沓に、くゑ

はらゝかし、はてしは、夢がたりして、ほまれとて、人の羨む、紫の、名高のうらに、よする浪、磯にみだれて、後の世に、そしりくだしぬ、あしたには、樂しと見しも、かげろふの、夕べになれば、そことしも、かきけたれつる、燈火の、光も闇に、天の戸の、岩屋戸たてゝ、こもらしゝ、神代のかたり、おもほえて、今のうつゝに、思ひえば、おのがほどゝ、一日には、三度ならずも、かへり見て、それにつけつゝ、ありなめと、おもふはたゞに、うら安の、やすきをたのむ、こゝろひとつぞ、

李氏は

出て遊ぶ魂は夢路かうつゝ、かもさむれは歸る故郷の宿

我は

故郷にあらぬ都にありわひて歸る日しらぬ歎をそする

硯の銘

すゞりはや、石のなめらかなるをよしとす、石なめらかなるは、ただに玉にたぐひす、玉はや、價かぎりなくたふとしと云ふも、月なき夜をてらす光の、むなしく目をよるこばしむには過ぎるべし、硯はや、墨に筆に心あはせつゝ、いにしへのこのまゝをしるしつたへつゝ、後に教ふるまめものゝ、光こそおとりたれ、いかで玉の弟とや云ふべき、誰か云し、硯はにぶきに生れて静なれば、齡は世もてかぞふべし、墨や、ふんでや、さかしきほどゝに、命も月に日にをはるとなん、おのれ思へらく、此三たり心をあはせて、はらからなし、千世萬代の昔をつたふるいさをの、齡もおなじといはいかに、鈍きにうまれて、よはひ久しきと云ふは、きのふの山路の不材の木のたとへこそあたりたらめ、海をふかめ、はだへをなめらか

にすりみがきつゝ、玉にたぐふらん物を、いかでにぶきに生れしとは云ふ、ふみは君なり、硯はおみのつかさ人なり、筆や墨や、各かるからぬつかさゝにつかふまつりて、いみじきいさををたてたらんが、永き代に朽せぬめでたさよ、いにしへ人の云ふ、眞手は不壞、眞硯は不損と、此ことわりをうまく心うべかりける、されば山にもとめ江に探るは、聖の君の、臣のつかさをえらぶにも似たりかし、玉を求むるは、かほよ人をえらぶにおなじく、光やかたちをめぐむなしわざにしもおぼゆれ、硯なめらかなりとも、堅きに過れば、墨を鈍からしむ、やわしければ、するはくだくにひとし、そゝや往しへをとむれば、竹をあみて漆をおとせしと云ふ光の、石なめらかならずばと誰しもおぼすなるべし、又聞く、硯のおろそげなる、筆ついえ、墨あらびて、友を損なへりとや、獨硯のみならず、よろづの

ことしからざるはなしとなん、さは色やかたちをえらぶは後なりけり、かれうたへらく、

神の代に沙の満ひる玉てふも常なきものを何か求めん
光こそ玉にはおとれ世の爲に光をみするたまはこの玉
海つらに雲をおこして行方に浦洲の鳥の跡は見えけり

右は學半齋翁のもとめにて

風 鈴

峯なす夕雲の立居する比は、必よ、南の風の薫りくると云ふ、むべも河内の足立の尼がおとづれ聞えしに、取そへて、風れらの詞、かうばしき紙二ひらに書つらねたるを、披きて見たれば、思ひぞ出る、こは此春、翁があたへつるかしまし物が上を、なつかしびて打出しなりけり、是をもろこしの何がしと云ふ大とこの、渾身口に似たり

とは、かたちの見にくしとはあらで、西より東よりの風をいとはず、物らいひつゝくるを、にやう舌とや疎ませけん、口は瓶の如くに守れのいましめをしらぬげに、風だにふけば、滴一凍やまらず聞ゆるはんにやの聲の、いともかしましきは、ふん土の牆の手枕をおどろかすを、あな憎しともうとむらん、なめて世にあるものをおもふに、鳥蟲の音、本草のさやめき、浪の立居もおどろくしからぬはなつかし、たゞ打しづもりたらん時は、あはれ、けはひばかりも聞えよとおぼゆかし、心ふかき人の、聲を息の下にひきいれて、物云ふこそいともにくくこそあれな、常陸の海の伊賀が埼、打もつゝかぬことを、舌とく嚙づるは、をのこだにあるを、まいてをみなはいともはしたに、なめしとも見おとさるゝを、我はさとらで、木末の日々らし、蘆の葉がくれのむら雀、くるとあくとに物の音をさへうばふ

ぞうたてある、此中空なるものが、野邊の松蟲をまねび、遠山寺の夕べを告るよとおぼしなさるゝ時は、文よみふける眠の友となり、つら杖に物おもひつゝくるをもやめてんを、誰かはうとんずべき、峯の松風琴の緒にかよひ、蘆のそよぎの笛竹にやと聞きまかふは、野分吹立ち、門さしこむるゆふ暮ならずかし、世に風を待ち、風をいとふものすくなからず、たゞく人の音づればかり、絶ずふけかしと思ふも、老て物がなしく、心のひまの多かるになん、

枕の硯

盗人書をとらず、鼠硯をひかずと聞つるを、怪し、我あらぬひまに、たゞ一つある硯を、蓋と共にわりすてしは、人のしわざにはあらじ、神やなしましけん、さは老ほれて、あだくしきすすびやめてんと思ふを、猶いとまある心のわづらひては、またも求めまくす、價た

ふときはいかでと、木に作らせしを、是はた神の焼ほろぼさせ給はんかし、此あらたなる友を枕邊におきて、夜はつれなし、あしたより問ひみかたりみなぐさむなん、人笑へとしもしるく、
 此ごろ人のかたりて聞せ給へる、六如上人の十春のことく玉の聲なるに次て、人々のおなじ響をなんさえく鳴させ給へりとや、我にも是にやまゝと歌よみ次ぐべくもとめらるゝ、いと思ひもかけぬ事なりとて、打そむけをる、み心にたがへるは、御かんだういとかしこし、をかしき物かたりもとめ來て、罪あがなはんとして、いにし跡に、おきわすれしやうにて、彼十の題ばかりかいつらねて見するなりき、さがしき人のしわざやとて、取收むともなしに、机のはしにおきぬ、その人あしたとく來て、よき茶くだ物たいまつる、きのふの題のこゝろうけ給はらばや、御枕の硯に、筆かはらせたまへと云

ふ、つらつきいとにくけれど、けふは何して永き日くらすべきと、おもひつる心になだめられてぞ、いかさまにもはかりて、翁をもてあそばせたまへとて、火とりの肩につら杖つき、此さがし人に物がたりするやうにてなん、
 むかし、清原なる人のむすめの、世にすぐれてさがしきがおはしけり、をさないよりも、親のいつくしみのあまりに、唐やまとの文らひろく讀習はせ給ひしかば、やうくおよづけゆくに、おのづからめゝしからざりしかば、後はたよからじと、私言する人もおはしけり、年月におぼしおきたりし事ども多かりけれど、家やまづしかりけん、紙のとぼしさに、いたづらにえしるさでなん過いたまへりける、つかふる御かたの、何のろくにか、よき紙あまた給うびしかば、つぶねのいとまあるをりく、筆とり、心のゆくまゝにつしり出

たまひけり、其はじめに、春もやうく明ゆく空のけしき、先おほし出たる、よむにさへ心のどけくぞありける、ひ月のおほやけ事はたさせたまひては、いとまありげにて、宮人たちの櫻折かざし、永き日やらし、かはらけとりはやさせたまはん、生ての世にだにたのしくば、蟲に鳥にもよしならばやとのたまひし、酒壺の君の酔泣も、春の花のものと遊び、たぐひあらじと思ふを、秋の月の前にはいかでとや、春秋のあらそひといふ事して、立むかへる宮びわざの、おのがひくかたに、しひていひさだむるよ、それさもあれ、道々の教へにも、我ときえたりとほりかなるも、おのがまことの心にはいかゞ思ふらん、とへかした、是きくわかき人は、あが佛ともおしいたゞくべし、如來の提婆をしをり給へりしかば、かくまで我をさいなむはいかにとへば、不平の心には、おなじ心してとこたへ給ひ

じとか、争ひの直からぬなんか、りける、物いへばよそくしくなりもてゆく、老は誰しもしかりとや、春に心よすとも、秋のあはれ思はざらんつれなし、霞引わたし、くもりげなるあした、やがてはれゆけば、九重のとのへにめぐれる山々の、大かたは見どころなるを、ゆかで思ひのいたれるを、若き人しらんやは、

右春晴

又八重雲たちかさなるけふは、雪か雨かと見るく、ふる屋の軒の玉水も、たる氷も、心あたかならん人は、是かいそぶりても遊ぶべし、

右春陰

夜はなほ長きをなげく老こそあれ、すむあたりのついで垣をもれて、

三くさの笛竹の音、空にすみのぼり、魏々洋々のしらべ雲のうらよ
 う落くるを聞侍るには、いかばかりみ心すさびしたまふらん、しら
 ぬにあはれのすゝめるは、世にめでたき物のねなればなり、七日の
 節會の夜、日の御かどの前に、御轡いくらかき捨て、仕丁ら檜垣の
 人やどりにかゝまりをり、火たきほこらしつゝ、手足あたゝひる、
 初夜過ぬらん、ねり出させ給ふ、松あかゝくと照させ、もんりうの
 御かたゝく、左みぎにそひ、杳おとからゝとすべり出させ給へる
 御かたちども、世にゐやゝかにたふとく拜まれさせ給へるは、たと
 ふるに物もあらずなん、誰やの軒に泣こゆるみどり子の、沫雪ふ
 りかゝれるを見つけて、あたりの人よりつどひ、いかにゝとはか
 りあはする、あはれゝ、捨し親はいづちにか這かくるゝ、すべな
 き世に在わびてこそかゝらめと、いきゝの人も打ひそみぬべし、

右春夜

あかつきは春こそわきて、峯の松のひまゝゝあかねさし、横雲かゝ
 れるあしたは、えもいはれずにはひかなり、風さと吹て、花の香お
 くりくるそなたを見れば、鶯の舌とく鳴て、枝うつりするさまざまれ
 しげなり、旅たつ人の、馬の上に殘の夢を見つけるに、衣はいき、
 露霜にぬれとほりて、いといたうさむし、山さくばかりの雉子の一
 聲には、目やさむらん、染ぎぬにも、花鳥ぬひちらせしすそに、ほ
 のぼのなるはめでたし、

右春曉

山は駿河なるぞ、御國の外にもたぐひなく高きと、夷の國人の、こ
 こにたゞよひ來て物がたりしを、なにがしの法師のから歌につくり
 て、世にといめられしを見しが、都方には日枝なん秀でたるを、近

江の人は、比良尙たかしと云ふ、駒とめて、此をのへの花見し人の目こそうら山しけれ、我ふるさとにては、武庫山さしもそびえたちたれど、たゞわか金を打延たるやうにて、見のうたてし、いこま嶺朝ゆふに望まると、此東おもてなる大和人も、おなじながめに云ふは、かたちなりと、のひたればなり、又是につゞきて、葛城や高間の山、ふたかみの峯々を西に、春日高まど、布留三輪はつ瀬、南なる鷹むち山、たむの嶺打こえて、よしの、方も見ゆると云ふ、藤原のみやこ人のよみたりしをおもほゆ、

見わたせは霞かゝれる山々も名には隠れぬ大和國原

三輪山なん立出も走出もよろしと見る、昔まうで侍りし時、よぶこ鳥のしば鳴し事おぼしいづ、しるしなき音をも鳴くかな三輪山の、杉の木むらに誰呼子鳥、

右春山

三輪川のはつせ川より流れて、末は龍田の立野にいたりて、立田川とよびしを、今は大和川とよぶ、それは河内の國に入ての名なるをや、紀路に落来てよしの川とよめる、山城川をさかのぼりには、まだ難波江こがするほどの御歌なるべし、さる遠しるき流れも、野路のいさら川も、池沼も、なべてぬるめる春は、魚も千里にのぼりゆくことや、それは師にしたがひて、道にすゝむたとへごと、も云ふ人あり、

右春水

雨のはるさめぞおもしろと云ふ、花の父は、のやうにいへど、うたて嵐のさそふ散がたには何とか云ふ、蛙の妻よぶと聞人もありしが、おほかたは、雨もよの聲とて、衣ときあらふをとめらが憎しとすら

めるものを、澤田に水たくはへまくする里々には、かしましものともいはで、

右春雨

雨もよならでも、月は霞めるよひくを、よき人のしく物なしとのたまひしは、思ひのいたりがたうこそ侍れ、

右春月

春寒しとは、鞍間の初とら詣、比良の八講、かすが祭の御つかひぎねのみさう束の、杉の下道、雪解のしづくにしといに立ぬれさせ給へる、又東大寺の絹ざく院のおこなひする夜、つぼねして居明す、いかに寒からん、難波船のみを曳のぼして、淀わたり過ぎ、伏見の岸まだ夜ふかければ、宿の戸わらく打たゝかするに、應々とのみに、あけぬほど、さえかへりし河風いといたうさむし、しかならん夜ぞ

ろに、醫師の門けはしく音なひて、さりがたき方のむかへ來たる、立出て見れば、空たかく、星きらしくかやきたる、身にしみとほりて寒かるは、おのが上にもむかし思ひ出らるゝを、又年ごとにはあらぬど、

戀くれば吉野の山路風冴えて花の林に雪ふりかゝる

右春寒

あはたいしく風に散る花故に、夢見草とはいふよ、そも躬恒の君にやもとづきけん、年越ゆる夜の敷寐のならひの、是やいめのうき橋とも云ふべし、さてしも云ひつゝくれば、後はたとりかへさまほしくこそ、そゝや、かひなくなつゝん名のをしといはれて、むなしく手引こめたらん君は、爪くはれ、いかにさふくしくやおはしけん、

右春夢

尙日高し、歌よめとて、えらべる題、追擬十春、そやの鐘鳴てよみ
はてぬ、

春天

風もなく晴たる春の空見ればつかさのいろは緑なりけり

春日

日を春と思ひそめけり垣めぐるいさら小川の音の豊けさ

春雪

沫にふる春の雪まの春日野にしめしやけふと若菜つむ人

春水

山の井の浅きになれて掬ふ手の雫もこぼる春のあらしに

春風

めはるより枝になしめる春風の訪ぬ日もなし野路の青柳

春野

草茂みあすの御狩にしめはへしかたの、櫻今さかりなり

春江

あはと見し舟は入江に漕はてぬ千里や來けん長き春日に

春行

この春は花見かてらの故郷にちりての後も日數へしかな

春眠

いきたなき朝戸を洩る、花の香に日影も高し起よいさ子ら

春宴

此殿の齡をいはふ庭もせにあすは雪ともさくさくらかな

この筆とる人は、翁をよくすかいこしらふる人なりけり、

覆舟硯 此云不世賀太

硯材以豫章者蓋神代之遺制也、覆舟之名見禮月令及古事記播磨風土記等、所用文成筆止覆而置之別不以蓋也、訓不世賀太因播磨風土記爾云、

雨かはづ

みな月つどもりがた、むら雨一日ふた日降とほりて、秋の初風すいしきあした、此里の人々、みとしおひ榮ゆるらん事を喜びつゝ、我やどりを、もろこしの何がしの亭になずらへて、人びとあつまり、ひと日くひのみしつゝ遊びのゝしるなべに、せんざいの花々あはせしてん、それいとをかしき事なりとて、さまざま花がめとりなみ、露打そゝぎつゝ、枝たはめ葉すかしなどして、是観る、めづらしく心ゆく遊びなりけり、其くさぐさや、夏秋のけぢめをいはず、おのがまゝに咲ほこりたる、くれのあやのはとりらがたてぬきの工みにも、

まことのいろ香はひときはにはひかにこそあれ、萩が花のやゝほころびそめし、きちかうは唐ごとにはくしけれど、蟻の火ふきと云ふ名の、歌にはまねぶべくもあらず、しるきはちすの花さゝげ出たるは、いくら城にや代らん、無價の珠とは是をこそと思ゆ、かきつばた時過したれど、猶色あひはすぐれたる、高きつかさ人の袖たれておはすらんにむかひや奉る、一日の榮えの朝顔は、奈良人の、秋の七くさにかぞへしは、むくげなりしとぞ、なでしこの花、唐やまとのくさゝ多かめれど、古き歌物がたりなどに云ふは、水かれし川邊の真なご原、草むらの中より、なよびかによるほひたるをぞよみたる、それは秋の末、かんな月の比までも、かつく咲のこりしを、後撰集、さらしなの記にもいはれたる、しのゝをすゝき、まだき穂に出ねど、袖打ふりて人まねきたらん、秋の野末のあはれ忘

れんやは、をみなめしをむせる粟の如しと云ふは、文字のたがへるにて、何某の璧の賦に、黄なるは蒸粟に似たりとありよと、江の師のいはせ給ひし、寔に粟は蒸ずとも黄なるをや、菊は唐よもぎといふ名、歌にはよまねど、此花やさう和の御時にめでそめしともいへど、それは唐國のくさはひにて、こゝにも秋の山路の、露霜によるほへるが、花に似ぬ香の、いきゝの袖にうつすばかりなるは、久しき代より有けん、よめが萩の花の今も摘はやさぬたぐひにやともおぼさる、此くさぐさは、いにしへよりめではやせるにつきて、歌にはよむを、是があまなるも、色香などやおとらん、檀どくの花と云ふ名は、本師の菜つみ水くみ薪こりつゝ、道學ばせし山にやおひ出けん、さるは御寺ごとくに植おほし給ふべきくさはひなりき、射干をからす扇と云ふ名、物に見えたる、是が實の黒きをば、ぬば玉と

云ふとぞ、古こと知のいはれし、漢の馬援と云ふ人、薏苡の實をなな車に積て、夷の國よりもてかへりしと云ふ、光をおび、かつ粥にも煮てくらふと聞くには、野なる眞玉とは、是をやと思ゆれど、射干玉と正に書しをもては、まがはじと云ふよ、名と物と、いにしへより呼たがへつるが多ければいかにせん、秋かいどろは、花の色、春さく木にもをさくおとらじものを、それは花散て後、葉のくろみづき、あつとゆるがるさし、けいとろの花、くゝたちよりもいとたけくしくやしなひえては、猿田彦の神の、すめみまの尊のみさきおひて、つきならし給ふ長ほこは、是が形したらめ、猶多かめれど、から名やまと名のまさしからぬはおきぬべし、茶かきたて、餅くだ物くひつみつゝ、ひねもすなん、山里のさふくしるも忘れたりな、簀の子にゐざり出てさしあふげば、伊駒高根に雲も居ず、

草香江の澤田の千町はるくくと青やぎて、鳥の聲は、此岡の松のむら立に囀りかはし、草むらにすたく蟲のね、心ぼそげながらも、いとなつかしうあはれ也、かれも是も我をなぐさむよとおぼしよるこべるにも、たゞ春の霞秋の夕霧ならで、物のあや見さだめがたきひとつなん、我身に寒き秋なりける、人々歌よめり、

萩

租 壘

さをしかのまたき戀せぬ秋のゝに匂ひなつかし萩の初花

はちす

吹風に露もこほさぬ蓮葉のはなに朝日の光まはゆき

すゝき

公 達

誰をかも松の木陰の花すゝきまねく袂にかよふあきかせ
かきつはた

かきつ機手折る袂のつゆにさへ濃き紫のいろにうつろふ

あさ顔

常 之

日影さす匂ひもはかな中垣に露おきまざるあさ顔のはな

常夏

夏草にましりてさけと撫子の露に秋そふはなのさかりは

菊

唯心尼

山ふみの家路のつとに折てこし香そなつかしき白菊の花

桔梗

秋近うなりも行かな故郷の野らにと宿はすみはそめねと

翁もよめと云ふに

むら雨の後のあしたの女郎花誰にわかれの露のなみたそ

重正けふ來たらず、歌よまぬ人々も、花になん心づくして、文月

十一日、きのふの夕づけてより雨ふる、うま時にはれぬ、十日にひと度のためしいとよるこぶべし、里人云ふ、是や饑米の降たるなり、野分だに吹われずばと、竹のねぐらの雀をどりしてよるこぶさまいとたのしき、あやしの小家どもの垣根を過て、かたるを聞けば、此雨よ猶ふれかし、田はた大かたにゆきたらひぬれど、あすあさてのほどや、又せき入切とほし、露のいとまあらんやは、我ともにあづけし里をさ達のゑみほこりたらん、中々につらくし、年もやがて暮ゆくべきを、今より思へば、しもと杖打ふりてさいなまれん、あさましの世やなど、おのがどち〜いひあへなげく、あく時しらぬげに、さこそはうらむれ、うらぼん來たらばをどりて遊ぶらん、秋の祭には物むさぼりくらはんなど、是うちたのみつゝ待ちたらん、啄長き鳥のさるささみ〜の人がらなれば、此いひごとば神も罪ゆ

るし、佛ぼさつもあはれと見つがせ給はんものぞ、た〜饒の神ばかりは、薩もつかじと、よらせ給はぬ人のほどなりけり、

右寛政十年の夏五月廿日まりより、文月のつごもり方までの事を、日なみのさまに唯心尼に筆かはらせし、山霧の記といふ中に書出せし也、目おもくやみていたはりすと、河内の日下の里の、正法寺と申す御寺にやどりしてありし時のことなり、

旌孝

人の世にあるや、大かた才能のはまれの、名を求めて知らるゝと、もとめずして聞ゆるのさがしおろかのけぢめはあれど、此二つは俱にいたづら事なりける、子の親につかふるこそ、このいやしき名を思ふにはあらで、親のたまへるうみの真心をしも損はず、學びて行なふと、庭のをしへをかうべにしてつとむるあり、又學ばず受ず、

只露ばかりもたがはじとする人のたふとさよ、近き世に見聞くは、いと貧しき人の子の、まだあけ巻めざしなるほどより、誰が教を見聞くにもあらず、いと有難き志もてつかふるは、うみの寶の子こそ思ひしに、やうくおよづけゆくまゝに、そこに在りとだに聞えぬは、いかに成立ちけん、いといふかしうもこそあれ、つかさ位高き公達は、御親兄のまへに冠を正し、かたちつくるひ、ゆめたがはじとかしこみ給へば、御心の怠りはいかなりとも聞え流れずおはせりき、富人の子も是にならひて、よしあしの名は世に聞えぬにや、今の世がたりに人の聞えし、都六條わたりに、馬場の何某と云ふ人、兄の病ひして、はかなかりしことにつきて、つかふる君の御いとまたまはり、母一人、兄の子のをさなきをつれて、市に隠れたりしに、親をかしづき、みなし子をいとをしむまめ心を、あたりの人の見聞

て、おほやけのみことのまゝに、うたへ出ん事を告しらせしに、あなかなし、子の親につかふるをほまれとせんこと、いとも耻あることなり、我はあからさまにこそ物すれ、召れて物問せ給はんに、何とかはこたへ奉るべき、うたへ出られぬさきにとて、母をおひ、をさなきが手を引て、夜にかくれ、いづちへも逃去んとす、家ぬし隣の人々あはてまどひ、かくたふとき志をうばふべからずとて、うたへの事止まりぬ、今は昔の御宮づかへに召かへされ、家をおこし給へりとや、又我難波の故さと人の、母一人を、兄おと、妹はらから三人がかしづきて、兄は老ゆくまゝに、めとれといへど、いかなるものゝ出来て、親につらきことやあらんとてむかへず、弟といもうとは、人の養なはんといへど、母のかたはらをさらじとてゆかず、母物に詣でんといへば、おといひ二人して興にかきのせ、になひも

てゆく、妹はつとそひてなぐさむる、はたおほやけに聞し召れて、物かづけ、重く賞せさせ給ひしなり、或人の母是を聞て、あなたふとし、かゝる寶の子を産ならべし人は、神ほとけの化身にや、たゞいぶかしきは、めとらず、養はせず、後いかなりともはかり思はで、其こしに乗て出遊ぶらん親の心こそしらねと、我にかたられし、これも世のことわりに承り侍りき、又鎌倉の何がし寺に住せ給ふ大とは、伊豫の國大洲のうら邊に、いさりする人の子とか、知識の名天の下に聞えたまひしかば、國の守の菩提院に召れて、道の教を聞せ給ひし、この便につきて、まづ母の老ておはすを拜み奉らんとて、詣で給ひしに、母のいはく、思ひきや、蛭の子のかくたふときになり昇りて、かうの殿の御召をさへかうむらんとは、されどそれたゞ才能のかたの學びをえて、まこと佛の教へにはうとときにやあらん、

さきくの便ごとに、文に卷そへて、黄がね白がねをおくりたまはること、いかなる心ぞや、今の子の立走りて、網曳釣だにせば、たふとき財寶をも何にかはせん、この贈らるゝは、世の人の佛に奉りし物ならずや、さらば道の爲にこそちらすべきを、淺ましき世わたりする身の、是を納めて、いかばかりの罪をかむくはれん、親の爲思はぬなり、いと恐ろしさにかへすぞとて、つゝめるまゝあまた投あたへぬ、大とおそれみかしくみ泣わびぬとや、これら人のかたりしまゝなれば、まこと僞はしらねど、學ばでもかくたふとき人もありけらし、庭の訓を受け、曾子のふみをよみし人の、かたはどだにえおこなはぬは、なべての事陵遅とかいふ文字の心にながれくだりて、誰もつとめねば、たましくなるを召上られて、物かづけ、名を旗にしるさせて、家の風を國にひかせ給ふこと、いとかしこきまつり

ごとになん侍る、伊豫の國今治の民矢野養父といふ人、六十踰るまで、母刀自につかふまつり、千々の一つもたがはじと行なへるを、國の守召上られて、しろがねあまた賜ひ、且國のいましめをゆるべて、絹着ることを親子ともにゆるさせし事を、遠く都に在る、其弟宮河保恭と云ふ人、はかせ皆川の翁に請て、つばらにしるさせ、國に贈りしなべに、我にもことくはへてよと、人して求めらるゝ、我この人を相見ず、且皆川がしるせし事、再び述べきにあらず、さりけれど、世の寶の子の、六十こゆるまで操のたがはざりしことを、羨みつべきものに、世がたりども一二つ書出て贈り侍る、噫父に別て四十餘年、母二人、さきなるはいときびはにて、面をだに見知り奉らず、後の母は今已に十四年のむかし人となし奉りぬ、いまぞかりし時は、日を愛すべき心を露ばかりも持たらず、大方の事ども御

心にたがひて、重き罪かうむりしものゝ、いみじき人のうへを思ふには、水無月ならぬ汗に衣をとほし、ながき息をのみつがるゝこそ、いともうれたけれとおもふも、くいひの八千度かひなきことになん侍る、養父の父尙正と云ふ人、國ぶりの歌をよみて翫ばれしとや、父の好める道なりとて、次で學べるも孝の篤きなり、我も歌よむ事を深うおぼし入れたれど、父母の庭の訓へにあらぬには、私ごとにして、是もつかへにたがへるひとつなりけり、さるは何のいたづらなる名をやもとめん、さがし愚ははた親のうみのたま物なれば、我なすわざかは、養父、名は畜、俗稱は養三郎、父尙正、俗稱は丹助、安永七年、齡六十五にて世を去ぬ、母ふさ、窪田氏、今年齡八十五、いとも世に有がたきかたり言になん侍る、于時享和二年三月かいしるしぬ、

つゝらふみ五

つゝらふみ六

鶉居

つながぬ舟とこそいへ、波によせられては、しばしとまりの岸も有
 けり、長柄の濱松の林はすこし隔たりたれど、隣れる杜の神の木、
 千年の陰にさしおほはれて、よそよりはやき冬もりの竹のあみ戸
 を、夜は引よせしまゝに、是をもたのまるゝよとひとりこつを、刀
 自が聞とがめて、よしや、釘さしかためし小がな戸も、君いまさぬ
 夜は、昔は物すぎましかりしを、今の時々のひとり寐ねんじわびつ
 つもあかすは、齡といふものゝ心えさするよ、よう年をわたりて住
 つき給はぬにも、めでたしと思ひし家には事しげく、君がおぼし知

らぬ物うさの侍りしを、此草むらの宿には、かうのどけき世も有けるを、わびしさにかふるには、よしともあしとも思ひ定むる心ならんあらぬと云ふ、あなかしこし、さらずばいかでかゝるものぐるひを見つぎて、三十年がほどをねんじ過させ給はん、我爲のまもり神にておはしけりと、かうべをむしろにつきて、手をすりあはず、打まみて、かう常にもたはれごととしてあらせるを、人はしらで、おにおにしとのみ忌にくまれ給へれ、此御有さま、さいふ人々に見せ奉らぬが朽をし、とまれかうまれ、かしづきはつべきには、うしとも恨めしとも思はで、たゞく夢路のたどり、一夜の草のまくらに思ひ過して侍ればとて打しづもりを、竹の戸やをらに推ひらきて、寐やし給ふらんと云ひつゝ、入くるは、此里にすみふりし飛弾人なりや、寒うなり侍るには、おのがわざのいとまのみになりぬるを、く

すしばかりにはおはさすぞ侍る、雪見給ふべき窓あけんと玉ひしはいかにと云ふ、さは云ひつれど、此ころの貧しさにはえせぬ、いと朽をし、あはれく、寶だに乏しからずば、此森陰をも建ふたげてんものをと時々打うめく、このわづらはす神こそなつかしけれ、この神は世の人にもつきて物に狂はするが中に、茶かきたつる人々こそ殊にも煩はさるれ、其友どちばかりあはすには、たゞく轍のあといさゝかもふみたがへじとするよ、笠翁と云ひしすき人にも神のつきて、西湖に臨む家づくりして、さまく工みなせしが、其ことごと我より出ざるはなく、舟にまじるし、株を守る人をあざめる、其事一家言と云ふ書に見たりしが、我も此人にならばまく思ふは、たいおろそげなりとも、便よからん事を宗とすればなり、昔五井の何がしと云ひし難波人にも神のつきたれど、財乏しさに、なさ

ばやと思ふつくりわざまをば、文に書あらはして思ひをやりたるは、物しりて心の高き也、又思ふてのみになさざるは、李唐の高祖の、隋の時の宮女をめしつどへて、物がたりせさせし中に、年くるゝ夜に、大宮の内ともし火をかゝげず、玉のいと大きなるを間毎に釣たれて、庭火たきほこらせ、其光をうつしとりて、かがよひかはせしかば、さしも廣らなる殿のくまゝ、おちなく見わたされしと聞給ひて、心しばし是に酔せ給ひしかど、立かへりて、あなみみゝとじ、さることのはてゝは、我に國をさへわたへつるよとて、いよゝつつしみいませ給ひしとぞ、よろづおのがほどをかへり見てすべき物に云ふ、されば天の下おしゝりたる君の、そればかりの事何かはと云ふべきを、思ひのまゝにはせじとおぼしゝこそ、三百年の久しきを、をたもち給ふべきはじめの君なればなり、蜀の山兀たらんにも、猶

つくりはてず、都をにしひがしに廣めて、殿の名ことゝ唐の代にならばせしも、天りやくの火に跡なく成んては、やゝくだりにくだりて、蘆のすだれ、うばらからたちの垣、あやしげにめぐらせ給ふ、かなしき御世も有しと云ふ、いにしへに又立かへりて思はゞ、足一きざみあがりの宮、尾花さかぶき、黒木の柱のためしに、いたくかなしぶべきにもあらじ、まして己が友のふせ屋の、ひた出に稻がらのむしろ取しきて住むべきを、ほどゝと心得たらんにも、たゞ便につきては、いつもゝ神にわづらはされて、身の程を忘れゆくめり、そこは神の御使して、雪見る窓をもよほし來るよと云ふに、飛彈人片ゑみして、我ともがらのねぎごと、ぬしはかたかれ、柱は弱かれと申すは、此御物がたりにもかなふらめ、壁ごと窓ゑりはたし給ひては、又立かへり、さむ風の爲にふたがせ給へ、さらずば

何して世をはひわたらん、岩根したゝかに杵築の宮つきならし、木會の山よしの、奥に、いづみの杣人入みだれ伐出しつゝ、つくりみが、せし寺も、神やしるも、天狗と云ふ神のほこり來ては、跡なくほろぼすを見れば、おろそげに時々つくりそへ給へるをこそよかめれ、あなさかしの我をわづらはす神言や、孔子の教へ、能仁の道のふみも、註かく人の、おのが心のひく方にことわり云ひまぐるよ、ひとゝせ九重の内外名残なくなりし時、一劫と云ふ灰は是にやと、人の泣きかなしみし聲は、澤邊の鶴ならで、天に聞えあぐるばかりなりしを、我彌さがしだつにはあらで、四のうみ靜なる代にすむ民も、しばしの波の立居をぞ見ると云ひしを、むべしく云ひたりなど云ふ人も有けりとかたるを、刀自かたはらより、ふみよむと、このすみわづらはすとは、よくもふかう思し、み給へるには、さ

まざま空に思し出たまひて、夜ふくるをもしらず、舌とくおはすよと云ふ、飛彈人ふところがみの中より物とり出て、是なんさきに見せ給ひし、秋鹿よぶ笛を、このころの暇につくりて侍る、こゝろみさせ給へとて見ず、ほうの木をすんばかりに、けたにはあらでけづりなし、鹿の子の腹皮もて口をつりなしたり、我もたるをもとらで、比ふれば、あらたにこそあれ、たがふ所なしと見ゆ、いざ吹てこゝろみ給へ、まなびつたへたらびてよと云ふ、とりて音を入れるに、所は山邊ならねど、松の下庵の風に吹あはせては、よそにかなしとも聞らんかし、飛彈人はやくまなびとりて、いはらじの御目こそいたくおもたげなれとていぬ、門出て、二十歩ばかりや過らん、しらべ高々とふきつゝ行く、我もいで吹あはすれば、草むらの蟲どもの聲たえたるは、聞しらぬにか、かれも戸に入ぬるにや吹たえぬ、此

飛彈人は田舎ならぬ木工の頭にて、かうさがしきわざをなんしをへる人なりける、歌よまずばとて、ふし戸にも入らず、

誰しかと寐覺てや聞く鳴かはす秋の末野のさよの哀を

足曳の山のさつ男かよふ鹿の小笛に秋の風のかなしさ

兎賀野ならねば、こよひに絶るとも、人の心をわづらはしめずこそ、

刀自もよむ、

しかそともすみも定めず鳴音かな山邊に今は入らぬはかりそ

あした野にゆくをのこ等が、夜んべの鬼の聲のおそろしきを聞つや

となん、山遠き里人は、聞しるまじければ、

其二

世を避る人のかしこきに倣へるにはあらで、たのむ陰を、加茂の古

堤のほとりに、おしふせたる庵づくりして、柱にかいつけゝる、

里住の松の扉をさしこめて心を山の奥になさはや

又ひとりごたるゝ、

たえくの宿の煙に身をなさてはひ隠れなん事の悲しさ

老朽ち、まなこやみつかれしには、身投てんふかき谷をこそ求ひべ

けれ、あはれなる山陰のすみか、いかでおぼしよるべきを、彼五井

の何某の書おかれしものゝ中に、いとをかしき事をこそ見出たれ、

曰、造室法、僧兼好云、以宜夏爲佳、確言也、余循其說云、開豁東南、仍設戸套、而

收之、如常式、乃環以縁、縁、方言也、戶外簷下、連布竹或板、以便登降、猶衣有縁、

縁外置水盤、連笕引水、以盥嗽、又以灌庭中草木、室西北必墻壁、壁下鑿低牖、

以通風、亘席亦設戸開闔、或垂葦簾可北距墻壁、五六步、就建書庫、西北隅植

竹、以遮夏日、東植梧桐數十株、以障朝日、廁溷必於室北、異屋別墻、架板爲步、

低欄左右、防傾跌、洩缸圍在廁外、俱勿及日、卽及日、臭甚、蟲生、方暑、登降、國穢、

雖不可耐也、其製以意消息、可浴室必於室東、勿與溷相及、世人與溷相隣、浴
 時臭大不淨潔、是皆以燕居之室、及書齋、四席半六席八席、而言若其正堂、自
 有定法、然不失此意、而可余性苦熱、夏日屈膝危座、倦憊殊甚、於是、有書齋、別
 式、以四席半六席爲限、營造依前制、不用綠板、磚地設榻、或椅、皆倣漢人居、鑿
 北壁、設水盤茶具、茶人謂之度者、具噴壺、以洒磚、庶可以耐煩、敵冬日別制牀、
 以排布磚上、仍席如常式、以禦寒、到夏則徹去其牀、是一室二用、嗚呼此營、不
 過費三四十金、事可辨矣、以財乏、且居屢徙、故竟不果、可歎、因以遺好事者、可
 謂爲他人作嫁衣裳矣、又晒曰、富貴之家、冬夏適居、何必一室二用、窮措大之
 言、往往如斯、これや文に心をやりて、ねぎ事をはたさざりしは、いと
 も有がたき人の心なりける、おのれも若きより家つくることをわかぬ
 ものから、此文のをかしきにつきても、心をこそ山住にはえなさい
 れ、すむ庵ばかりはとて、をちこち思ひめぐらすに、まなこしひま

どへるには、便おぼつかなき境には、心ばかりもえゆかで、南禪寺
 の内に、昔しばしがほど假初ずみせし庵の、今は荒につきて、野と
 なりし處をなん、先おもひよれるまゝに、彼はかせの、人の爲にと
 云ふ、我そのすき者と名のらん事、人笑へに、かつは物狂ほしけれ
 ど、心ばかりに云ふ、一室僅八席、中以四席爲起臥之處、而左右四席、以
 居常當有物備焉、南面且席、設戶開闔如常式、戶外竹緣、國語云須乃古、廣四
 尺長九尺、西磚地三尺、以便昇降、緣外以葦竹造矮籬、底下垂葦簾、蓋炎夏庭
 地焦爍、烟氣蒸室中、故將禦之、籬上或竹欄、可以倚肱、宜納涼、宜翫月、室中東
 壁、亘四尺、所藏之書畫、一二幅展觀焉、其北鑿牀、置文机、又北坑、火爐、架上置
 飲器茶具及米鹽焉、西壁亦鑿戶、牖以昇降、但使客不入耳、其北一席垂梅花
 紙帳、以爲藏褻衣被褥之處、北窓半席、開戶迎風、戶外板緣、東底下竹架上、水
 盥漑飲漿、但烈寒之夜、不貯、恐堅氷破裂、西北東司別宇、以廊通之、廊間置水

盤、且火爐沸香湯、以避臭也。然小室不堪寒暑、故屋上以茅覆之、且東西壁外、簷下垂葦簾、簾中蓄柴薪、以防山嵐之氣、唯甍外除之、然春朝秋夕、座望戶外、則粟田獨秀、如意叡嶽、低昂斷續、青濛々雨陰々、北窓相對、黑谷吉田、峻宇層塔、映帶竹樹、如畫、丘陵田野似織、或聞野鶩水鷄、或聽鶉聲鹿鳴、松風颯々、草蟲唧々、足以爲閑友矣。北籬外泉聲潺湲、恰似枕流、而有乞火啜茶之憐、扶老最志誠、薄命之病隱、舍此又何處耶。然土木之費、今靡所辨、默而止矣。噫、斯言爲誰書、而遺之、惟是解憂遣悶已、しかすがに山住ものどかなるのみには、あらで、夏の毒ある蟲の啄をいたみ、冬は霜ゆき氷の朝な夕なは、いかに思ひきゆるらん、花は散りてもやがて出じといひし山ごもりの、すまであはれをしらんや、はと打なき、又雪のふる日は寒くぞあるな、ども云ひつる、三とせがほどのありさまも、おほながら心のかよふなりけり、其住捨し跡、をちこちに見れば、修行と云ふ事のいみじ

さ、なほ人のまねふべからぬをさへおもほゆ、又世の亂に都の内外も荒にわれゆけば、たゞかり初の庵づくりを、車につみてさまよひありきしとや、あなう、柄整折れ、柱ゆがみて、すさまの風をやいたむらん、かくても世にありふべきは、すぎやうの大事にやほだされけん、さるかたの教へ、ふつにおぼし知らぬには、いぶかしむべうもあらずなん、たゞ心のかよふまじきは、河原のおとりの樓霞觀のありしさま、宇治殿の河邊のたゞずまひ、西園寺どの、津の國吹田の山莊などは、翁等がいやしき思ひしては、露ばかりもおぼし知らるまじきものぞ、又大宮づかへをゆるされ、或はやめられて、野山にのがれし人の上は、ふみにつたへてあまた見聞くが中に、つかさのきぬの色ながら、山ふかく入しこそいみじうたふとけれ、みかどに立ては世をまつりごち、庵のどかに住みなしては、あまねく病

にしるしある薬をなめわきて、そくいんとかの心をいたらせしとや、
 わづかのよねに腰は折らじとや、其始よりさる操ならんには、さる
 下づかさには出たつまじきを、事にあたりていさやかへんなん、歸
 れば童等が門むかへして立をどり、田ばたあまたもたるには、濁れ
 る酒乏しからず、垣ねの菊を手折て、軒にあたれる南の山を望み、
 心なぐさむにも、一たびはおのがさがしきにいざなはれて、世には
 立交はりけん、緒すげぬ琴に趣をしらば、つかへの道のうるさげな
 るを、いかで思し知らざりけん、又隠るゝを名にて、人の望みをえ
 まくする人は、翁がくらき眼にさへ見とゞめらるゝをや、心たかき
 がはひかくれずして、よく隠るゝにいたりては、いかで見たまへし
 るべき、いひつゞくれば、あやしのしこ翁と、世の人つまはじきや
 すらん、ある人のいへる、山棲のたのしきも、國の趣をかへては、

人目をかしからんと營むには、市朝の人に同じとや、うべも心たか
 き人の言は、思ひしみて忘れぬぞかし、翁世に立さまよふ事、三十
 とせあまりが中に、村居ふたゞび也、世の人云ふ、村居必閑寂幽趣
 ならんとや、翁云ふ、しかれども愛憎の二つあり、其愛すべき者、
 遠山青黛匹練 曠野陰霧成籬 菜花誘繡 霜葉丹青 春曙 秋夕
 月夜旅雁 深更寒蛩 春雨蕭々 草露顆々 總角驅犢時謳且叱 野
 寺鐘聲夕悲且待 霜如衾 雪爲墩 菘菁鮮美 新穀先嘗
 其憎むべきもの
 亢旱祈雨 三冬無被 藥牀糲食 三月垂蚊帳 非綿或紙輒入 蜂結房
 人來則整 蛛布網除即幙 春夜蛙鳴妨眠 秋風暴吹害禾 野鼠飢穿
 墻 狐狸窳盜飯 或水濁或柴薪乏 無朋無詒 貧民餓鬼 里正閻王
 誰言粒々皆辛苦 然稅稻非精不納 又思苦樂不偏 風雪雖不可出門 開窓

濟氣直先臻、古人云、硯之發墨者必費筆、不費筆則退墨、二德難兼、非獨硯也、大字難結密、小字常局促、眞書患不放、草書苦無法、茶苦患不美、酒美患不辣、萬事無不然、僕云、世途將亦如斯哉、噫、文なん唐さまは習はねばたどくしきを、五井の博士のしりに立てまねび出たる、狗の尾繼たりとや、老のほれくしくて、垣ねにすだく秋の蟲の、つゞりいと見ぐるしくもさせるものか、

こを梅

鶯の宿、春かけてしめしも、やうくわれゆくさまに、梢にしほみ、木ごとに散こぼるも、香ばかりにははしきは、雪にこほりに、寒きあらしをもたへしのふが、こと木にすぐれたればなりけり、ささらぎ立て、水の鏡をくもらせては、老をかくさふとするよ、風けぬるく、野山のかすみをかしく引わたしたるを、おのが時ならずとて、

散はつる心の、いとすぎましな、おなじくさはひながら、紅に匂ふは、薄きもこきも、香こそおくれたれ、春知顔とはこれが盛をこそ云ふべき、すむ庵の軒ちかう五もと六本枝をかはし、色香をきそひつ、咲出たるに、春日のかやかしう照かはして、いと花々しきに、鶯の木末なつかしう、又是にうつり来て、巢つくりなどするは、子をばいかでか生まんとすらんと、人のとがめたまへるばかりに、住なれ貌もにくましからずなん、花のかたち、こきもうすきも、すこしふつ、かめきて、八重にあつてえたるを、よき人の見たまひては、若き女房の、おもてあらはにゑみほこり、かはらけとりはやし、今やう一手二手、扇打ひろげてまなび出たるさまになんおぼすらめ、さればあまりにやしほに染つきたるは、枝もこちたく、うたて打見らるれ、春毎にめなれなつかしまれては、この花さかざらましかは

と思ひなりぬるは、さすがにわてなることゝも見しらぬ心から相おもふなるべし、やうく散がたになれば、薄きはもとより、こきもあさましうさめゆくを見れば、雪とまがひしには、むべもおとりて見ゆるをや、きぬの色あひ、紙のかさねなどをうち見ては、まさりげにてぞ、それはた世にわてやかならん人の、針目をかしうひねりぬひてめさせたまはんと、墨次はかなう書けちたまふらんをこそ、いとめでたしとは見奉れ、髪の末ほそり、ひたひすこしあがりたる人の御爲には、いとむとくにやとおぼすはいかに、まして世をすて、ふかうそぎなしたらんおのがたぐひの、今は手だにふるまじきけざやかさを、身におはぬ言めでして何にかはせん、夏の來て、さみだれのころに、三つなつ落こぼれたる實をひろひては、せちみのいみじものにたふべかりける、されど高きいやしき、老もわかきも、

先めうつりするは、この花の色あひになん、しかしがに解わらひぎぬの黒みづき、黄ばみなどしたるを見れば、こと色よりもうたて思へば、はやりかに花一時の色とは定めらるゝなりき、山風さと雨をさそひては、ひと夜のほどに散はてたるを見るに、色は即空しく、假初ものなること、是につきてもおもひしらるゝなりき、

河内國くさ香の郷の唯心尼が、すむ軒の木立に、あるじにかはりていへるは、しひたるもとめのさがたければ也、今や花の時過にたるは、昔聖武のみかどの、西の池の宮の花の宴を、五月のそれの日に、御遊び有し例をおぼし出てぞ、物はいふなりける、
 僕已不才且不幸泊然三十年齡將七旬心力形骸漸衰死後無一人之有
 座骨者矣是以卜壽藏于南禪山中西福精舍之紅梅樹下且作棺以託寺
 僧優遊俟天命已於是二三名家以老友之故忝斯文嗚呼不亦幸哉

學半齋

此翁何所餘、餘年藏卜壽、厥卜在南禪、好文木所有、先試入寫生、應將造化、手十月渡江、春新題屬舊友、余長翁五年、生天恐不後、亦嘗營壽藏、帝鄉遊待久、墨痕同暗香、文名餘不朽、

力齋

翁之清節不羈、可比梅樹、勁幹屈曲不撓、梅花紅嬌芳馥、堪敵含英茹華之文、雅翁可驕于梅、梅可不愧于翁、余不能詩賦、聊書此語塞其需云、

右二章應瑞畫上之題言

長夜室記

南畝子

客歲于役浪華、吏事之餘、見一奇文、云是餘齋翁文、激賞不已、願見其人、既見之、常元精舍、不啻奇其文、而其人亦奇矣、乃請山家記、翁亦不按、不日而成、益信其奇之為奇也、小杜所謂、杜詩韓筆愁來讀、似以麻姑手爪搔、余於翁文亦

云、夫一見而贈縞帶一絕、而不復鼓琴、古人之於知己、有如此者矣、今歲聞翁作長夜室、以蓄焉、一棺未蓋、萬事既休、予亦瓜期將還、江戶便道過京、與翁訣矣、噫、翁無用於天壤間、々々々亦無用於翁、無用之用、知者幾希矣、白日昭々、長夜冥々、昭々之中冥々如此、冥々之中亦有昭々者否、是我獨奇翁、而人所不以不奇翁也、翁上田氏名秋成、號餘齋、一號無腸、又號休西、去客於京、

棺をつくらせて、その蓋にかいつけゝる

長き夜の室としきけは世の中を秋の翁か住むへかりける

一日紅梅の樹下に遊びてよめる

信美

散るまてはゆめ手をふれし梅の花をるをゆるしの色に咲くとも

信愛

消かての雪にたくへて咲出るまかきの梅の花のくれなる

なきつゝも妻こひてふる鶯のなみたや梅の色をそむらん

我もよめと云ふによむ

紅はふゝみなからに散てまし咲くをうつろふ始と思へは

嵐山夕曉

老か世に心とめねはこの春の花に名残の旅寐をやせん

ひと夜の草の枕の夢がたりに、花の散るのみ見つゝあかせし正夢は、
いかにかなうもおはしけん、いめ破る嵐の山の松の聲、むせび
流るゝ瀧つ瀬の音、此むれ來る人のさはめきには争ひかねたりな、
かはづうぐひすも是が爲に音をいるゝよ、戀する人の夕とゝるきの、
おのれ胸さわがるゝには、立かへてあひなうもあるかな、やゝ家路
に行わかれては、山の色、水の面くれはてぬるを、あやし、花の影

のみ臚に見ゆるは、うつゝの夢のたぐひにかも、其うつる瀬ごとに、
かはづの聲のさゑくしきは、たが歌垣にやしらぶらん、木にのぼ
る魚の躍走りても、花に宿はからぬなるべし、河洲の鳥の聲、千代
をことぶくよと聞くも、ひが心なる翁こそ、いまはしく耳ふたがる
れ、こよひ磯枕ならぶる人々は、あかすも聞わかすらんかし、花の
日數のしばしなるには、八千代の聲は、鴉てふ鳥の虚ごとや習ひ
けん、春の花、秋の紅葉も、ときはかきはの色ならば、いざ駒なめ
てともとめこと、ちればこそとは、世のことわりをいはれたれ、夜
の更るを告るかねの音は、花にさはらぬをとて、人々やすいして、
明ぬほどより、うつゝの夢路をたどるゝ、瀧にむかひて見れば、
夕べは山のみな暮はてしにも、水の色にとめて見し、其影の夜すが
らなりしは、明行くまゝに梢にかへるも、ときと遅きは、濃さ薄さ

にこそあれ、本ごと朝心して、かたちつくるふさまを、何にかた
 とふべき、そゝや南の殿の簀の子に、つかさ人次々居並び給ひて、
 袖たれ襟を正して、歌づかさらが立まひ御覽ずらんや似たる、さ
 のふけふ、とからず遅からぬが、峯におひのほり、岨にそひ、峽に
 かくれ、ときは木のひまふ、繞れるが如、蟠るに似て、尾を曳き、
 雲に吼え、或は落たきつ瀬なし、流に影見るとしづえを垂れ、空に
 指ざし手とりかはす梢、さまゝに色香さそふとぞ見る、まだき散
 そめねば、花おもげにも見ゆるかな、けさの雨もよに、空はつるば
 みの下染して、雲のむらごの立まひは、月をのみ妬むにはあらぬか、
 河霧の立つとも見えぬが、峯に立昇りては、蘆火たくいふせさに薫
 りみちて、小雨打そゝぐ、袖がさかづきつれてくるほども、返り見
 すれば、薄雲我跡をうつみ、さとふりく、風吹そはねば散りもはじ

めず、けふを盛のほまれ顔なりけり、朝かはづのかくれぬ聲、木傳
 ふらぐひすの高音、いと竹の曲に及ばぬあはれさ也、雨しきりなら
 ねど、けふの日ねもす翅しほれて、梅の花がさ求めわびぬべし、又
 かはづの夕かけてこゝろくを、誰も耳敬だゝするを、妻呼あはれに
 よみたりしは、出ましの宮のとのる人の、家の妹戀しらにおぼす心
 まどひして、なれもこそとは打泣たらめ、老が頼める人をさいだて
 て、けふこそ花に腰は反すれ、ことしばかりのながめとおもふには、
 此谷ぐゝが聲よ、あはれゝと聞ゆるなりけり、よひあかつきのけ
 ぢめあらずも、現の夢の正夢を、又もいめの幻に、ちりかふさへ見
 ゆるなん、昔の躬恒の君が花ごゝろにもあゆるかな、歌もはた夢が
 たりのやうにて、

夕浪に影ほの見えし櫻花香は夜すからの風にかをれる

雨もよふ深き霞のひまもれて花に色かす曙のそら
色わきし花も霞める天霧に朝よひしらすなく蛙かな

山彦は答へこそせね鶯の聲の盛のはなの木かくれ

櫻天并序

間 齋

瀧原豊常設櫻花宴于西峨會者無腸老翁小川布濟前波默軒田山敬
義澤益等都十有五人也可謂盛事矣無腸翁有夕曉篇叙事歷々令人
遺想不止予復傲翠賦櫻天篇一章聊買餘勇而已實癸亥二月十九日
也

春立七十有五日處々櫻候多一律今年正月有閏餘稍覺催芳春脚疾上
京何處無鶯花就中西我富烟霞友人折管兼訂約唵筵儼得賣酒家是日
櫻天色如卵郭外春陰濃烟暖嬌鶯百囀呼吟朋戲蝶雙飛邇女伴吾曹扶

翁後群至同人跋望虛座遲相逢先忻并四難團欒把杯訪幽致乘醉晚步
峽水頭春漲一畫碧于油滿山春風香霽合臙脂滴々膩欲流昏鴉已定遊
人散渡口片々舟閣岸愛看花邊暮色遲山光水色互續斷石鷄呼雨自弄
聲水禽驚夢時打更共驚籬緯已生白起曳枯藤重吟行曙色空濛雨霏々
天然畫幅真妙繪芳潤正知花魂王或疑此中女仙會金母蹈雲欲朝天毛
女橫陳枕岸眠青童捧珠王女蓋白鸞彩鳳相後先須更亂雲生松枝起滅
無端幾追隨到此花事極萬態生看花未看此奇此奇況復得奇文吾曹何
須更云々歸木燈下離筵睡兩袂翠烟帶餘芬

秋 芽

蟬の羽衣猶なつかしまるれど、朝おく露夕吹く風は、秋を告る便の
いとこそうれしけれ、垣根の萩のおいしはふける聲、牀ちかゝらぬ
きりくすの鳴音、月の光も花々しき比なり、玉あへる友みたり四

人さそひ出て、野や分ましと云ふ、雪まの若菜をこそ春日野にはま
 じるべけれ、高圓の野への秋萩かざ、ばやとて来る、習はぬ道芝は、
 まどふともなくて、いとおぼつかなさになぞ、袖裳すそしとゞにてあ
 ゆむあゆむ、野づかさめける所に、こむらさきの色花々しく、露おき
 みだりて、はつゝ咲初しをかひあるものに、まづとめよりて見れ
 ば、おしふせたらんさまのいほりして、人もすむとぞ見ゆる、あな
 づらしけれど、まよはし神やつきたらんとて、さしのぞきてももの
 へば、いとも古代なる翁の、谷くゝが大名持のおまへにはひ出たる
 さまして、いづちの便にこゝに來たまへるぞと申す、秋芽の花見は
 やさんとして、ふかう分入ぬ、いと朽をし、一枝だにかざ、で家路な
 どらんはと云ふ、翁かたゑみして、をかしの御ありきや、さは千年
 のむかし人達にこそおはすらめ、此野の秋にめで、宮居つくらせ、

御幸あまた、びなりしこと、文に歌に傳へたれど、今ならぬはるか
 の世に跡なくなん成んで、おく露も吹く風も、色に匂はぬには、山
 もはた、里人のこりすさび、刈わらして、鶯かほ鳥の宿をうしなひ、
 鹿の立どもあらはに、いとあさましとこそみゆれ、されど山づみか
 や野姫のみ心ばかりはあらびはて給はじものを、谷峯のをちこち、
 野のくまゝには、御袖にははすばかりは咲たらめを、ようこそ分
 入せ給へと云ふ、かたちをもてはろうずまじき教へをさへ思ひ出ら
 れて、人々恥かゝやかしつゝ、翁はいみじの物しりにこそおはしけ
 れ、昔の飛火守し人にてやおはしつらん、物いはゞ猶やさしからめ
 とおもふゝ、墨つぽに笹葉の露そゝぎ入て、おそるゝかいつけ
 みす、

高圓の野へ見にくれは袖ひちて露ふる人に遇ふか羨しさ

翁あまた、びおしいたゞき、あなめづらか、さればこそ古こと好せ
給ふ御かたぐなれ、聞きもならはぬには、何ごとか御るや申奉ら
ん、かはづらぐひすのねにも聞過させ給へとて、もえさしたる竹柴
の炭して、垣根の黍の葉ひとひらつみとり、かいつけ出すを、とり
て見れば、

秋萩の花すり衣見るなへにつゝりさせとも蟲の鳴なる

都人のいとけがしとや思すらめ、心もことも身のさまも、きたなき
麻呂にこそ侍れといひて、打かしこみをる、此野の遊びこゝを去て
いづこならんとて、芝生の藪打はらひつゝまどゐして、翁酒たうぶ
や、かれひも持たるはとて、檜わり子草の上に置きちらし、人々物
聞んげに、山邊の鹿の膝折ふせ、あら野の鶉のはひもとほりつゝ、
あるは面杖つき、打しんじをる、何くれのかたりごとの、いとめづ

らかなること多かり、杯の流あまた、びなるに、翁も酔しれて、け
ふこの野に遊ばせ給ふ御歌よみて聞せ給へ、翁もすゝびたるまゝに
まねび奉らんと云ふ、人々けふよまずばとて、打かたぶき、うめき
出せる、いともはれの歌にて、れいよりはきたなげなる、いと朽を
し、

祝部 基因

高圓の山の麓の眞萩原古枝みたれて花さきにほふ

度會氏麻呂

高圓の野行き山ゆき秋芽の花すり衣我そにほはす

高向 日蔭

芽の花つきてさかなん益等をの射る高圓の野への露原

大了 法師

高圓の野路の萩原むな分てをしかの通ふ道は見えけり

和氣垂水

高圓の宮出の朝の袖すりて露のむたにそ芽の花ちる

鞍作植竹

はきの花今盛なり高圓の野に庵してひとやとりせん

翁

や、聞ふけりて、さてよめる

身のはての枕の岡の萩の花人のかさしに今日は匂ひて

およつれごとくも文字のかずばかりはとて見する、人々酔ひちして、たいぼめに、ふかう心をまではもとめずや有けん、秋のならひに、暮やすき日は伊駒高根に落かゝる、今はわかぬ別を告て、又まうでんと云ふ、とく出た、せ給へ、野には犬と云ふおそろしきもの、立はしりて、くひつくぞかし、そなたをさ、せ給へ、御かたゝの家

路そと、ゆびさし教へて、もとの田ぶせにはひ入ぬ、見かへるゝ、野づかさこそ見ゆれ、夕霧のまよひに立やこめけん、何もゝあらずなりぬ、ふる言あながちに學べば、又そのかたの迷はし神のつくぞかし、ゆめゝ、

枕の流

みな月の初より、秋かけて、河べのやどりのあらはなるにも、打みだりがちに、老てはるやなきを、人々のゆるしかふむりてありふるほどに、ひと夜小雨打そ、ぎ、人げなくさふゝしさに、寝やせましと、まくらによれば、べうぎの尻、こよひこそいともどかなれ、よひねめづらしとて、うれしげに戸たてなどす、夢もまだむすばぬほどに、廂の古すだれの、おのがどち打た、かひさやめくほど、立よるほひたるやり戸を、おすかたゝか、やれたるまどの紙は、あ

つものをすゝるおとししてともし火やけたると、人よびおこせば、物におそはるゝやうにて、起きもこず、秋たちて幾日もあらねばといひけんをも思ほゆ、枕の流はさゝら浪や立つ、ふなぎほひこそせね、棹かぢのいきかひ、よそろくなど聲よびかはし、漕わかれ行くとぞ聞ゆ、やゝふけゆくまゝに、ならべる軒、岸のむかひの家どもの、ひしくと鳴さやげるは、何ならん、ぬす人や入ると耳そばだゝるを、あらで、西みなみの風あらく吹來たるなりけり、野分とて、小田の益等男の立走りつゝ、龍田彦の神あらびなたまひそと、なげきするにも似たりかし、さりけれど、此年のあしきよなど聞ぬことのうれしき、老が貧しきにつきては、年ゆたかなりとも、あしくとも、何ばかりのことかは、富人もはたしかるべかりけり、いにしへより秋にあひておどろきざまに、或はさびしさをかこつ人は、其お

ぼしよるところさまぐにて、歌よみ文つくる人ばかり、身ひとつにおぼしゝめてかなしむことの、かへりては心そらなりとやいはん、家をうしなひ、かなしき女をさいだてゝ、ひとりおきふしたらんには、春の曙秋の夕べも、さふぐしさはさらなり、今はかけても思しゝらぬいにしへの戦ひの場の、幾とせ経ても人住つかぬあら野らの尾花高がやおのがまゝになびきあひたらんに、雨ふり風さむき夜は、鬼の火の飛走たらんをさへ、まさめならずばおぢまどひもせど、はぎの花をみなへし、くらゝりんだう、真葛のはひあるきたらんに、夕べをまたで鳴さかる蟲のこゑぐ、名もしらぬ小草の花々、露霜にもみづる淺茅原、木枯にちりかゝる何くれの廣葉の、からからと音して、そことはてなく走り行くも、山の紅葉のから錦なるをも、かなしとのみは誰もながむまじきをや、木の葉の落るは、下よ

りめぐみつのぐむからぞといひしを思へば、天つちのまゝのあはれを、うらみつべきことかは、秋に心をよする人は、春のにきは、しきを、うたてたれこめてもあらめ、荒たるこの宿の秋の夜といへど、吹ゆがめだにせずばと思ふく、戸や吹はなつらんとて、しばしもまどろまぬに、我尼は、ゆめ此夜のさわがしきをしらで、うまいせしほどに、夜はやうく明ぬらん、小舟どもの漕つれて、かたりどとするは、河じりいかに吹つらん、入つどひしが打そこなはるゝばかりにはあらじかし、やうく吹よわりたれば、おのがとものつみはこぶたよりこそよけれとや、鶉のやどり立てよびかはしつゝ、いつち行らん、やをら起出て、朝戸やりはなちたれば、雲の名ごりこそすさましけれ、あかねさす空の、この大江に影うつれるを見れば、いつもの花のいつもく、曙ばかりうれしきものはあらずなん、ひ

とへ打かさねたれば、秋のさむさもさびしさも、いとくなつかしうて、おもふにかなふ比よとは、昔打出しおのがつたなきことをさへおぼし出られてなん、

一木たに陰見ぬ軒に音たてゝ何に聲かす秋の此夜は

間 齋

草に木にそれにもからて大空に高く聞ゆる秋の聲哉

癸亥之秋寄包于阮先生浪華大江橋塊寓舍之日一夜天已三更四壁蕭寂清風瀏亮恰如在萬里波濤之中話次偶及秋聲賦先生卒然口占乃文予走筆記之即時文成矣嗚呼斯文搜索古人之遺失而悲哉之情盡于此矣謂之吾家歐公恐不强也

亭和癸亥初秋晦夜繫纜于大江橋西偶風雨暴至不能上岸倉庚困臥既而着北岸宿通家某有使侍婢通于先生及曉天少晴走詣文階獲觀

此卷、如余不文、徒苦于實、不能華于其文、如先生巧撫其景、能踐其實、不
及熟讀終篇、遂服其妙々、兼具因跋、

十時 梅厓

三 餘

あしのまろやのかり初ずみの、はやも六とせになりぬ、風にかたぶ
ける軒のひさし、むぐらはひのぼる壁のこぼれはさてもあるを、あ
なかしこ、かや野姫の神のみ心のあらびたまひて、雨だにふれば、
枕にそぼち、衾はしといにぬれとほりて、夜をいも寐ず、よしや、
なげのやどりの花の陰におぼしなすを、こちたくなげく人の爲にふ
いあらためさす、野べにかりこしかやのみだれは、飛彈人のまがな
もてけづりなすが如に、あなすがくし、翁が爲の萱の宮居ぞとか
たゑみして、心ゆくよろこびはすなりけり、一夜暮ぬと見る空に、

雲立かさなりて、ふりに降りつゝ、かしら出すべからぬにも、こち
たかりし尼の、いとこそ嬉しけれ、面しろの雨やと云ふ、おとせぬ
草ふきも、窓をうち、廂をたゞきつゝ、夜たゞこれに、夢もあらじ
をと、炭たきほこらせ、茶烹させてすゝるゝ、かたり言す、雨夜
の物がたりとて人すなるは、にぎはゞしきわたりの遊びなり、薨高
高にふきなせし御館には、園の林や、池なみやにめさまされて、か
はらけとりはやし、みやびごとずんじ出給ふらん、昔の帝の、これ
がおとのうときをおぼしたらぬものに、よるのおとゝのひさしに、
板さしはさませて、聽雨と是をなん名つけ給へりしとや、過れば民
のなげきともなれど、天つ水乞得ては、ひと日一夜あそびのゝしり
たるやどりをば、喜雨亭となんかいつけしとや、こよひの雨をうれ
しとおもふは、うさにかへつる喜びのあまり也、あなおもしろの軒

のしづくやとて、戸すこしやりはなちて見たれば、くらき夜にも、
庭たづみのながれあふに、ともし火のかゝよひて、落たる雲はこゝ
にはひ入るよとおぼすにも、かや野姫のあらみ玉は、こよひにぎ玉
におぼしえづもらせて、おほけなき袖うちかづけたまへることのか
たじけなさよ、此またあらびたまはんまでは、世にはひかゝまりを
らん翁かは、

此夜らやみつのあまりの雨こもり文見し窓は昔也けり
うしと歎き嬉しとも聞く夜の雨は昔もしらぬ戀の亂か
冬の夜に何をたのめて明すらん葦か菴の雨をもりつゝ、

享和癸亥霜月廿一日の夜、ひとり言を、尼にかゝせおきつるを、
廿二日のあしたかい清めぬ

よもつ文

此文は、珊瑚尼の三とせになりにし比に、又めのとのやうにて
めしまつはせし、はしための身まがりしをさへおぼしなげきて、
夢がたりを書せし也、わざとに書あらはすべきにあらねど、こ
のふみどものしりへに、かいつらねつ、

夢に六つのけぢめを云ふも、なべては愚さの煩ふにや、うつゝのい
めてふなん、ましてやるかたなき心のまよひなりける、
幻の人の行へをたつぬれはおのか心にかへるなりけり

霜こほり、風いたう身にしむ夜、れいの寐ざめがちなるにも、しば
しまどろむやうなる枕を、おどろかしてくる人あり、誰ならん、か
しらもたげて見れば、この三とせがほど、我をいたはりかしづきし
うばら也、松山貞光 俗稱いさ難波よりまうのぼりし後は、かり初ぶしのやう
に日ころ過せしが、よくこそとひ來りつれ、いとおぼつかなかりし

をと云ふ、いとかたじけなく、いかにおはすらん、心もとなくてのみ過い侍りしを、こよひめづらかなる御使してまゐで侍りしなり、たゞ今いききて住つきたる所に、ゆくりなくいきあひ奉りしかば、御ありさま、かつ御むすめの御事、我もまめ心して御宮づかへし奉りしやうをも、つばらに物がたり聞え侍りしかば、いとうれしき事、御いとほしさおぼし知らぬにはあらねど、國の境ありて、たゞ物のべなたりつれば、いきて見奉らんとも、またこゝにむかへたいまつらんとも、すくよかにはおぼしたゝずなん、そこには四十九日がほどかしこにいきかひてん、便につけて、文ひとつ參らせよとてたまひぬ、猶のたまひしかど忘れつとて、さゝげ出たるを、いそぎとりて抜き見れば、にび色のこまやかなる紙に、れいのことえりなく、まめくしくかいすくめたり、

しばし見奉らぬほど、おぼしゝを、此まめ人のかたるを聞けば、三年なん過い侍るとか、こゝには春秋と云ふ時もなく、年月とかいひて、指折かゝむるわざせねば、垣ねの忘草おふしたつるにもあらでなん、墨の江の小濱の蜆、あきてだに見えさせ給はぬ御目の、いといたう悲しき、常の御ことに、いさぎよく、ほどく海川にも入てんなど、こちたく聞え給へるを、うたて耳過し侍りしを、今もしいきす玉などのさをひ出らん、いとおぼつかなく思ふ給へらるゝなり、御むすめのみ心かなはぬとてないたまへる、人の心々なるは其面の如しと、常に教へたまはずや、世に玉あへる人やはある、手を折れば、十と云ひつゝよつを歴て、御宮づかへし奉りしほどにも、かうじさいなまれ、からくおぼえしも幾そたびぞや、たゞ見はなちたまはぬをのみかたじけなきものに老よ

るほひつゝつとそひ奉りしは、松の操の教へにならふにもあらで、身幸ひなく落はふれ給ふいとほしさの一すぢをなん、ふかうおぼしゝみぬるものから、いかにせよとか我を捨けん御かこち言、いと身にあまりかたじけなう承侍る、おにゝしとて人のいひなるをもおぼし知りつゝ、たふまじき御ほんぜうこそいとすべなけれ、御よはひ高く、世にしられたまふを、むごにいひくだし給へるを、誰もわたらしきものに聞えたまふなり、御ひかり、くすしの御とく見給へるをおもふに、御世も猶しばしあらせ給はんがいとほしき、物狂ひといふ名はやうよりおひたまへる、いでやみ心なる世も出こじものを、かういへば、御佛に物きこえ奉るためしにもこそ、いとまかしこけれど、此うどん花のたよりに、くり言たどゝしく聞えたいまつる、あなかしこしともかしこし、

よもつ坂千曳の石もとりやらんあな動きなき君か心は

かへりてはおにゝしくこそ、

よみはてゝ、今は國たがひつれど、野中の清水もとのこゝろさしのまゝなるぞいとかたじけなき、よろづよくねんじてんといへ、竹のねぐらのめなし鳥も、朽をしくかへり聞えずばとて、此文のうらに、たゞ言みじかくて、

むかしの人のいへる、國を去り、うからやからにうとまれ、家わざをせず、あそびてかへらざるは何人ぞや、是を狂蕩の人と云ふ、又才能にほこり、名をひゝかさん事をのみつとめ、おのれをいかなりともかへり見ぬは何人ぞや、是を智謀の人と云ふ、此ふたつともに道を失ふとや、翁此ふたつをのがれず、さらばみじかき才に苦しまんよりは、狂蕩の人と呼ばれて遊ばん、一つだにうれたき

眼を、見はたけて何せん、死は安しと聞く、只今たゞ追行ん、國へだて、はいふがひなし、

取放つ千引の石の安けくは越んよやかてよもつひら坂

是奉れ、相むつまじく翁をまてといへと云ふ、うばらかしこまりて、こゝにはかゆきようして誰かはまゐらす、まめ麩時々煮て奉るや、いとおぼつかなくなん、とく出たゝせ給へといひて、目さめぬ、あな恥かし、愚さのあまりには、かくあさはかなる夢見はすなりけり、

附録

露分衣

珊瑚 尼

あはれく、身一つなる此秋を、いつの日にかは忘るゝ、煙の下に拾ひとめしを、みおや達とひとつ所に納むべく、我をも召つれ給ふべきに、したがり侍りて、都の二條河原なる眞行寺と云ふにさ、げまうづ、こゝにしも今更なる別れの、すゝろにかなしうてぞ、誰も世に在はてぬ身をながらへて、いつまで袖の時雨ひまなき、長月十日あまり一日のけふよ、しぐれの雨に袖笠して、いづこしらずおくれじとあゆむく、下の社の森陰に來ぬ、はやうをさなかりし時に、過させ給ひし親達の、難波にうつり給ふに従ひまゐらせられたば、都の名だかき所々も、老ゆく今まで尋ねも見ず、今の母君のお

はする世には、いかでと思ひたえにしを、此はかなき便にこそ、をかしき野山にはまじりぬれ、いとめづらしな、糺の川にさしおほへる梢どもの、やうく句ひをむるを、なつかしうながめらるゝ、秋ふかみ色ならぬ枝もいろぞます、まなくしぐれの雨のふれゝば、ことしの夏のえやみは、まさしう此下風をはじめぞと聞え給へるには、したにはおそろしけれど、すくよかなるけふの御遊びに、過にしうさも忘れられて、いと面白うてなん、十日まり三日の夜の月を、嵯峨野に見すべく出たゝす、したしきひとの御女をそゝのかしまるらせて、己が友に物がたりしつゝ行く、梅津の里なる橘の君のがりとむらひつれば、けふは内参りし給へるよしにて、はゝそば、若草の御かたぐゝ立むかへ、よろづねもころに聞え給へり、此軒ちかきはじのもみぢ、いとよく染たるを見て、
時雨するもみぢの秋を

尋來て、先木のもとのうれしかりけり、こよひこゝにとしひての玉へど、心ざす野の草枕むすばんとて、あながちながら立出つゝ、さが野の厭離庵といふは、去年の秋とひよらせしゆかりして、わりなくやどりもとめ侍るに、尼君心ゆくあるじゝ給へれば、うたて思すまで打とけたる、いとよなめしかし、此いほりは、昔京極の中納言の君の、老て住給ひし御跡にて、其世のかたみなる柳の井てふ泉あり、又御むすこのれんぜい大納言殿の御墓のしるしもたゝせませり、いほりのたゞずまひ世に似ず、木立物ふり、砌の苔ふかうむしたるに、露打ちらしつゝすだく蟲の音のよわりげなる、かれやこれや、とりあつめたるあはれさの、身にしみて思ゆるにぞ、
聞しよりおもひしよりも悲しきは、さが野の庵の秋の夕暮、月早くさしのぼる、雲がちながら、
幾とせかゝけし思ひの雲はれぬ、小倉の野邊の

秋の夜の月、見せまつれば、やがて其はしにかゝせ給へり、思ふ世のあるは命ぞなほや見ん、嵐の山の春の曙、さは打たのまれてなん、此ともなひし君の御歌、わけそめしさが野の原にやどりして、心くまなき月をこそ見れ、ながめつゝあれば　秋風に雲のまよひも吹はれて、更ゆく空にすめる夜の月、翁、　露さむき秋の庭草虫鳴て、所がらなる月のさやけさ、山風やひくといさめ給へば、名残あれどふしぬ、あくるあした、この野のくまなくわけ見んとさだめ給ひしも、けふのそらのどかなるに、高雄山の梢の心にかゝりて、打こえゆく、大澤の池の面は、木葉散うきて、秋菊の影も見えず、梅が畑といふを過て、見れば、　染つかぬ梢ながらに久方の、もるゝ光をもみづとや見む、となんいひて過させ給へる、むべも雁の翅は蔽はねど、露も時雨も漏らぬ林なりけり、こゝに心よしのお

はして、山づと一枝給へるを、さしかざして、とがの尾の橋に行み見れば、こゝなん思ふにまさりて、いとをかしく染なしたりと見る、此光のまばゆさには、いふべきやうもしらずて、庵に歸れば、梅津の經すけの君とくよりとひ來て、待わび給へり、山づと見せ奉れば、手折こし一枝にしるき高雄山、みねの紅葉の染る染ぬは、物がたりとばかりして暮はてぬ、君おくりがてら、河邊に出て月を見る、橋の君、山の名のあらしに峰の雲晴て、川せさやけき月を見るかな、我おきなの、大井川早瀬にくたく月かげの、すゑはかつらの波にすむらん、照かはさせ給ふ、つとめて又とひ來り給へり、けふ此野のしるべして給ふべき爲なり、たゞふた夜のほどを、千よのむつびして、別がたくす、尼君のたまはず、昔の君の御たむけだになくて、あはたゞしげに立出給ふよと、翁かしこまりて、　しき島の道し

るべせし君とへば、さかの、原の苔の下露、尼君とりつたへて奉り給へり、局を出るより、をちこちたづねありく、をぐら山ふもとの御寺にまうづ、此峰なる時雨の亭と云ふは、まこと圓光大師を火そらむりし奉りし御跡なるを、何もの、偽言せしぞと、物知のかたり言せしよし、尼君の聞え給へりしかば、昔しのばしからず、のぼりても見ず、檀林皇后の御はか、野の宮の跡拜みめぐりつ、大井の大寺なる三秀院にまうづ、こゝに任有亭と云ふは、近き世のすき人の跡とめし、いと幽かなる庵のなつかしさに、窓ども打やりて遊ぶ、こゝに橘の家とじより、さゝへわり子もたせ御使あり、いとかたじけなくなん、翁、昔此いほりに一夜あかし給へることのおはせしよしを語り給へり、御歌ありしと、
なげきこる山にもいらじけふよりは、うきを命のあるにまかせん、おぼし出てかたり給ふなべに、

から歌壁におし給へり、枕是碧溪石、衾便丹楓嶺、終身只任有、詩忠一僧、禪、もとのあるをしのばせる心ばへなりとぞ、こゝは山の姿川の流、世にならぶ所なしとや、わきて、春ごとの名にしおひたる嵐山、紅葉の秋の色やまさらんと申せば、我は云ふ、春のあした秋の夕べにまされりと、から歌うたはせ給へり、秋を引かたにいひしは、大津の宮の古事とのみ思へりし、ぬかだ姫のみ心ばへのしのばしきに、ならひていひしを、いと古き代よりも争ひはてぬこと、や、杯の流あまた、びなるに、酔ひほころびしかば、經すけの御歌ありしかどもらしつ、河をわたりて、法りん、松の尾、月讀の社拜みめぐりつ、や、ふかう、西方寺にわけ入る、こゝもなかば、かり染て、いとほびかなり、此庭のたゞまひ世に聞えたる、昔は琉璃の閣として、いとさらしくゆほびかなるがた、せしを、今はほろびて、

名をだに聞しらぬよ、梅津川をわたりて、梅津の橋の家にやどり給へる、男どちは聞しらぬ昔のことどもかたりあはせ給へり、をみなどちはめ、しき事のみいひつゝ、笑ふく夜更て、枕の野邊の風のおとかときけば、うたて、むら雨のそぐなりけり、あなうとのみにあかしぬ、立まふ雲のひまより、かゝやき出る朝彦の御影いとうれしく、猶しばしをと聞え給へど、古さとに心ひかるゝ事のあれば、あるじのけふの内まゐりの御後につきて、又都をさす、こも枕高瀬こぐ舟を、いぬ人の伏見の岸に乗かへて、夜べのなごりのむら雨の雫を、笹のひまにわびあへつゝ、夜をすがらに、目もあはでなん、

夏野の露

田鶴の居る、長柄の濱松陰にすむ翁ありけり、身の病はたさんほどを、いとかり初なるいほりして住けり、此垣の隣に、世に貧しきが、

親はらから住む人あり、心ざしの直かりければ、朝夕とひかはしつゝ、ねもごろになんかたらひける、女をむかへて、をのこ子の生れしを、かいだきて見す、いとおほきやかに、玉の光をさへして、めでたかりければ、誰もくゝよろこびあへりけり、此子のふたつと云ふ年に、うばは病して死けり、年月ふるほどにわひぎやうづき、舌とく物らいひて、萬にぎえありと見ゆるを、翁いとうつくしかりて、身のなやめるやうをも忘るゝものに、膝の上にすゑ置て、いとほしみ給へりき、我はまして是をのみかしづくやうにて、翁の物、おのが物をぬひつゝりて打着せ、とりはやすにぞ、此ひとさとの貧しきが子もたるは、あやしうねたがり羨むものもありとなん、三つになりぬる秋の比より、ふとしもなやましげにて、すくよかなりと見しも、やうやうおとろへぬるにぞ、翁かなしがりて、薬のしるし見せ給へと、さ

ながらにてなん年も暮にける、親はまして、神佛に願たてけり、此ゆゝしきめ見るにたへがたくて、心も亂るゝばかりなるに、人の教ふるは、いづれの御神、み佛にまさりおとり給ふはあらじを、地藏ぼさつなん、かうやうの時は打たのみ給へと告るまゝに、近き所に祭れるに、日毎わゆみて、かきくどきねぎごとして打わづけたいまつれど、いかにせん、三々の山本しるしなくて過行くほどに、いたのみなく、いみじきこと限りなし、春さり、夏の初の、此ぼさつたのみすると云ふ日に、道びかせ給へるにや、むなしくなりぬ、あなやあなやと泣さけべどかひなし、翁足ずりをしつゝ、聲をあげてない給へり、是をも見るめのくるしくて、いかなるすぐせにや、親にまさり、おひ立たらん末までを、とやせまし、かくやなどうちくおきてさせ給ふものを、今は何もくかひなきぞと、枕にのみ獨で

たせ給ふ、此二とせがほどは、よろづにおそろしきまでおとなびつるも、長かるまじきにやなど口々云ふ、限りあれば、野に送りいきて、灰になしはてぬ、さほうよりして、何もく我翁の徳になんおこなひ給ひぬ、手足もゝがれて、立るだに心に任せず、ないくらす程こそあれ、煙の下に拾ひといめしを、今はとて、難波なる一心寺と申す御寺にをさめまく、我肌につけて、翁を扶けつゝ、はるく詣はべりて、花見れば秋の霜にもあふものを、このなでしこよ盛またずてといへば、翁は耳ふたぎ給ひて、物もいはせ給はず、ここに納むとこそいへ、捨てゆくものに、杖をもつきたがへて、こいまるび給へるを、涙に目のくらみて、扶かねつゝなん、日をふれど、さらにく疎からず、人目むとくにこそおはしけれ、五月雨降はれぬれど、心はさらにくあかゝらずとて、ひとりごち給へる、

はせで目にもみ見ゆるさみだれの、闇のうつゝの山ほとゝぎす、是のみならず、此里のやどりのうたておぼす事ども多かめれば、今は旅に飢て死なんとしも思しさだめて、先都を心ざし給へり、おくれじとしたがひまつる、我ふる里なれば、昔おぼし出て、まぎるゝ事もあるを、中々に淺はかものとやおぼしたゝん、みな月の七日は、園の神の御祭とて、大路せく人立つどへり、物見べき心にもあらねど、ともによろほひ出て、をちこちしあるく、あるものならば、是見せたらんに、ゑみさかえたらんを、いな、世にしもあらば、けふこゝに出たゝんやは、ほだしならぬことの朽をしと、みそかごとしつゝも、此きらしくしくまばゆき、さまざまの物もめざましからず、人のいつき子のいたいけしたる、あきものゝいみじくつくりたてたるを見れば、是得させたらんにはとさゝやきつるを、とくよりしか思ひつ

れ、今は物も見じ、色香とて人のめではやすは、我爲の鬼のすだくにぞ有けるとて、やどりいそがせ給ふ、み心のいとほしさいはんかたなく、御うしろみする身も、ともに涙をのみそへまゐらす、いといふがひなしや、忘れんと思ふ心の中々に見るにまされるうさにこそあれ、かくばかりしのぶ心を、をさなきがしらで、戀らん事のかなしさ、何にとゞまれる世ぞと、又うちなかるゝよ、此照る日にも、しとゞにひぬ袖なるを、見て、都の友垣達の、さる歎のみこりつむ藪原に、待つ人とてもなきを、何いそはしくいなん、今しばならずとも、月を嵯峨野大く江にながめ、紅葉を北山のくまゝにかざせよかし、伊駒嶺すこしはるけきには、比枝のみ雪見ずてやは、いづこもく草の枕のかり初ぶしをと聞えたらびぬるに、み心のとゞまるとはなくて、よしや、繫がぬ舟は、風のまにくとてなん、白

雲のあはだつ山の麓に、膝ふたつは入るまじき宿もとめて、何すとか明しくらすにも、さすがに見きく事どものめづらしきは、あしかる事のみになれこし、難波るなかのしづのめがひが心になん、

いつの暇にか、かゝるはかな言して打おき給へりしを、物の中にさぐり出たる、やりすてんは、わすれんとするひとつの心なり、しかすとも豈わすれんやは、とまれかうまれ、老くたち、活くべきにあらぬ命には、よそめやさしくとも、露分衣とゝもにかい清めて、したしみあつき御寺にをさめ奉りぬ、本九條の農家の女、いとさなき時に、植山の某に養なはれ、父母にしたがひて、難波にうつり來たる、年廿一、我にかしづき、去年の冬、五十八にして世を逝たまひぬ、常に多病の故に、齡五十一

と云ふ年、我母、おのが母をも見つぎはてゝ、髪を薙ぎ、名をも改む、文よみ手習ふわざは、はかしくしからざりしかば、人に見すまじくせしに、おほくはとゞめもおかずなん侍る、

つゝらふみ六尾

後序

蓋吾見世善和歌者矣未聞善國文者凡國文之難非啻今也自古而然若夫古今集序之駢儷也三鑑之典實也勢語之簡潔也源氏之繁富也可謂金聲而玉振之也者矣嘗讀扶桑拾葉集

皇朝文藻炳焉可觀而至於中葉以下則意達而已矣唯惺窩長嘯二老以脩辭爲文所謂豪傑之士者然藤偏於古而聲牙難讀豐偏於漢而鉅釘可厭蓋國文之難不其然乎辛酉祗役浪華得見餘齋翁邂逅相遇願適談劇翁手書歌若文數篇見贈吉光片羽可以爲儀意在筆先如不覺其難者然甲子有崎陽之命倉皇上道々過浪華再見翁々年七十禁絕筆硯平生所著藏之香火院有昇道師者焉翁善固請上木吾聞之喜而不寐到崎視事簿書堆案餘冬

儉間略綴數語郵致諸昇道師不知吾之所蘊能中翁意否

文化紀元甲子仲冬之吉江戸大田覃書於瓊浦客舍

明治四十二年四月五日印刷
明治四十二年四月八日發行

(奇籍大觀第一編附錄子奧附)

定價七拾錢



校訂者 宮崎三味

發行者 吉田尊一
東京市神田區表神保町拾番地

印刷者 中野鐵太郎
東京市京橋區南小田原町二丁目九番地

東京市芝區岩間町丁目貳番地
東洋印刷株式會社發行

發兌元 日吉丸書房

東京市神田區表神保町拾番地
振替貯金口座東京一八八二〇番

販賣所 全國各地書林

宮崎三味著

隨筆

眞偽不保證全

表紙口繪石版並ニ
寫眞版刷
本文二百廿餘頁
定價金四十五錢
郵税金四錢

絶無出色、妖怪の傳記、盜賊の傳神、意あるものは來つて

讀め、意なきものは唾棄せよ、艶魔！ 奇騙！ 妖狐！ 怪

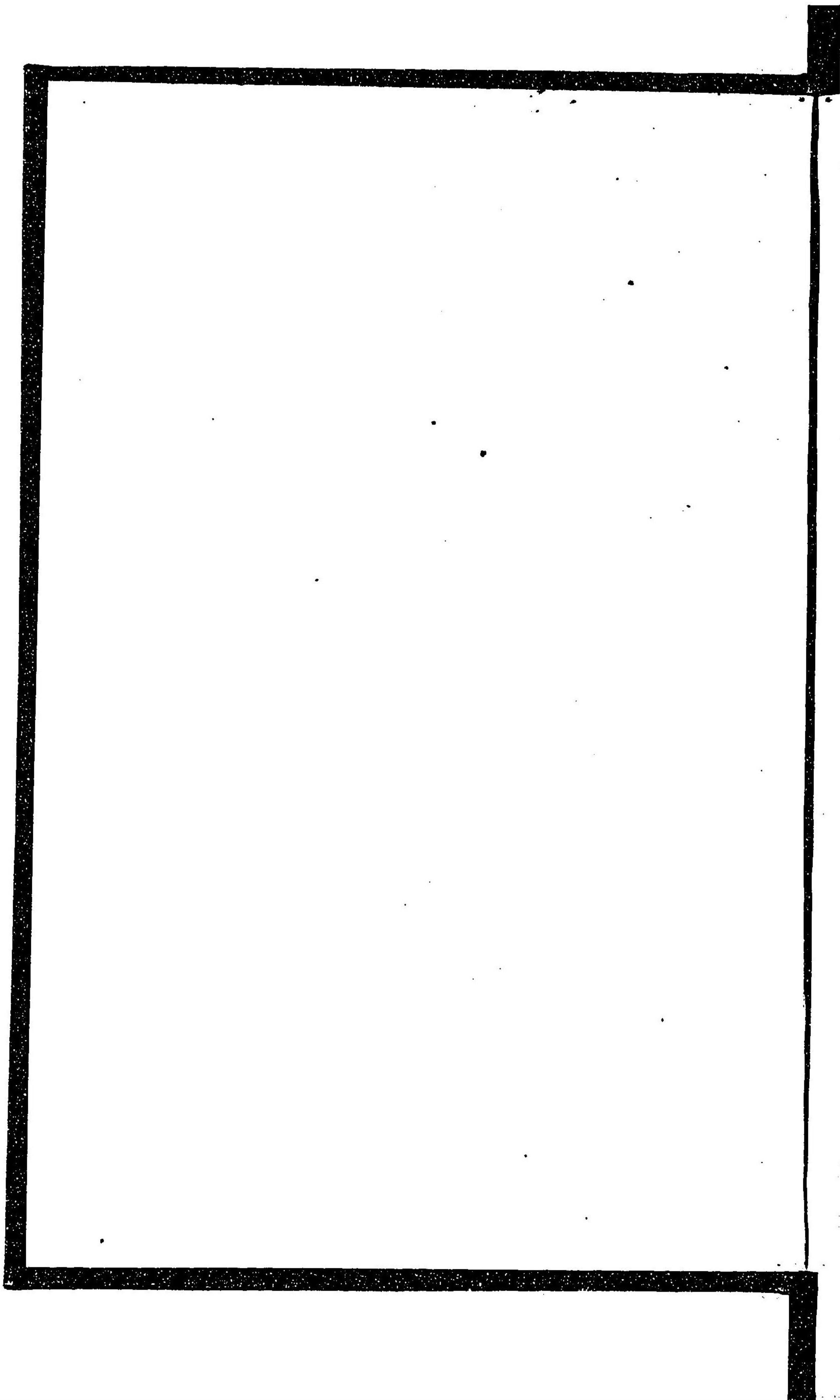
仙！ 毀譽好否の如きは此書の顧みる所に非ず

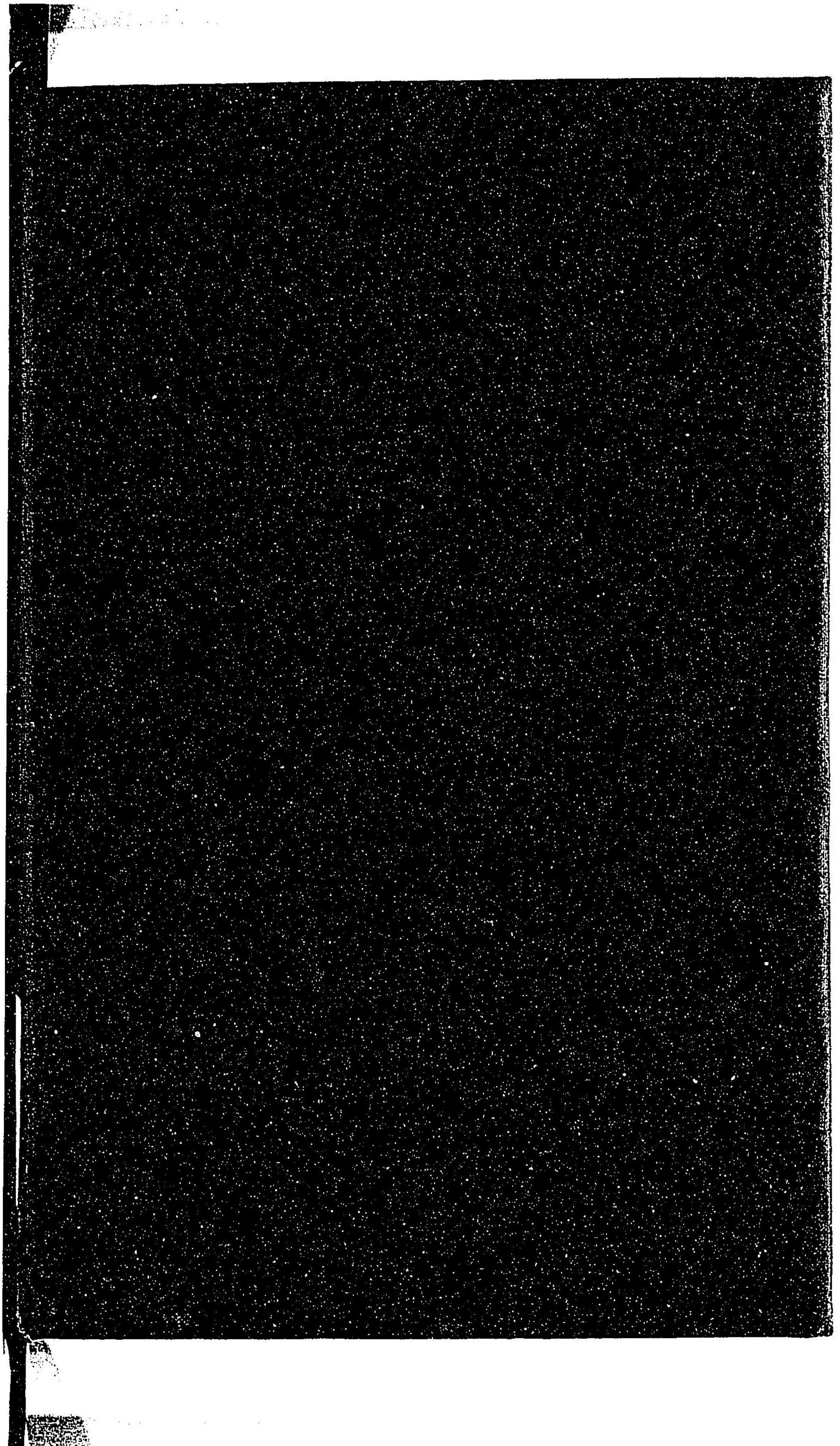
發兌元

東京 神田

日吉丸書房

振替貯金口座一八八二〇番





914.5
U149t
M

205267-000-3

914.5-U149tM

藤箕冊子

上田 秋成/著

M42

EDV-0328



